
Evergreen ~ 永久なす緑 ~

宗像竜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Evergreen ～永久なす緑～

【Nコード】

N1134M

【作者名】

宗像竜子

【あらすじ】

永久に変わらぬこの緑に願う。運命のその時まで共に在れる事を……。
かつて村人達が残した緑の足跡。そこにあるのは人々の願い
そして、祈り。
大国間の戦いに巻き込まれ、滅亡した国アディア。
その元王女と、彼女を守護していた元天使の物語。

永久なす縁（1）

建国歴572年。

その年は、その国の民にとって忘れがたき年となった。

大陸を東西で二部する大国、東のシャウルド・西のマザルーク。

その国　　二国の狭間に位置する小国群の一つ、アディアはその二国間の戦に巻き込まれたのである。

狭間に位置するが故の不運と、後の世の人々は語ったが　　当然の事ながら当事者にしてみれば、不運などという言葉で片付けられるはずもなく。

間に挟まれ、定まらぬ情勢にどちらにつくとも決断出来なかった王が自害したのを皮切りに、その国は混沌の時代を迎えた。

ただでさえ緊急時であり、流石に表立っては王の死は伏せられたが　　何処に目があり、耳があるのかわからない王宮の事である　　王宮側が必死に隠し通そうとしたその事も、市井の民は日が変わらぬ内に知る所となっていた。

寄る辺となるはずの王を裏切りのような形で失い、守ってくれるものもなく戦火は日々強まる。その結果　　民が己を守る為に他国へと逃亡するのはいたし方のない事であったらう。

つまりその年は、一つの国が国としての形を失った年なのだ。

一年あまり続き、やがて和平を結んで元通りになった大国の間。

そこには国としては名ばかりの、国のなれの果てが存在するばかりとなっていた。

ひよつとしたら　　それは初めから大国間での謀^はだったのではないかと思えるほど、簡単にそれらの国々は東と西に吸収されていたのだった。

+ + +

アディアの城内は、炎に包まれていた。

それは屈強を誇る東の軍の手によって、今まさにアディアという国がなくなろうとしている所だった。属国ですらない、完全に地図上から一つの国が消え去る瞬間。

焼けた空気が、吹きつける。

瞳が乾いて、生理的な涙が零れるが、少女はそれを拭う事も出来なかった。

「熱……痛いよう……」

舌足らずな言葉が、その小さな口から零れ落ちる。

しかし、それは何処にも届く気配が見えなかった。

腕や足には軽度とはいえ確かな火傷があり、年端もゆかない少女にはそれは十分な痛みとなっていた。

「お母さま……痛い……」

母親に助けを求めるが、逃げ出してしまった後なのか、それ以外の理由があるのか、少女の周りには人影はない。

炎に彩られた太い柱が、爆ぜる音を盛大に上げながら、嘲笑うかのように無力な少女を見守っていた。

「熱い、よ……」

出口を求めて歩く事も諦めて、少女はその場に膝を抱えて蹲る。

そうしていれば、いつか誰かが助けに来てくれる、そう信じての行動だったのかはわからなかったが。

燃え盛る周囲。やがて、ミシリ、と不吉な音。

反射的に顔を上げたその瞬間に、焼けた天井の一部が炎を纏ったまま落下してくる。

少女は逃げる事も出来ないまま、それが自分に向かって落ちてくるのをただ呆然と見つめていた……。

永久なす緑（2）

「ほらほら！ これだよ、リーフ！！」

目的のものを見つけて、少女は満面の笑みを浮かべて駆け出した。「すごいね！ もう、こんなに大きいんだ！！」

「ああ、良かったな」

全身で喜ぶ少女とは対照的に、彼女の連れ リーフと呼ばれた青年は無表情のまま、味も素っ気もない返事を返す。

「何だよー。もうちょっと、何か言ってもバチは当たらないよ？

本当にリーフだったら情緒に欠けてるんだから」

つれない青年に少女は頬を膨らませた。

彼のそうした態度は毎度の事なのだが、折角の喜びに水を差されていい気がするはずもない。

少女は一見した所、十二・三歳程。栗色の長い髪を二つに分けて頭の両横で束ねた髪型が、嫌味なく似合う。

大きな目には明るいオレンジ色の瞳が、差し込む陽光を受けてきらきらと光っていた。

「この木はねえ、ここにあった村の人達が、自分達がここで生きていた証をつて、一人一人植えたものなんだって！」

まだ森とは呼べない、せいぜい木立ちという程度のその小さな森林を示して、少女は嬉しそうにそんな事を語る。

艶やかな葉。初夏の季節に差し掛かり、そろそろ春に芽吹いた新葉がその緑を増しつつある中、不自然なほどに開けたその場所に林立するそれは、不思議と目に美しく感じられた。

ここに、我等が生きた足跡を残さん……。

十年近く前に滅んだ国、アディア。その国境付近に当たるこの辺りは、最も早く戦火に包まれ、そして最後までそれは途絶えなかつ

た。

よく見れば、大地の所々に焦げたような跡が残っているようにも見える。

ここは一つの村の跡地だった。

森を切り開いて細々と暮らしていた人々は、戦火を避けて村自体を放棄した。

それでもそこに思いが残ったのだろう。彼等はそれぞれ去る間に、村の中心にあった一本の木から枝を切り取り、自分達が暮らした大地に植えていったのだ。

周辺の森の木々はほとんど落葉樹だが、村であった場所に生えている木々は対照的に青々と葉を茂らせている。

…常緑樹。

一年を通して緑を失う事のない木々。人々は自分自身が死んでも失われる事のない、緑の足跡を残したのだ。

「こんな事をしては戻って来れないだろう。つまり、村人が完全にこの地を見限ったという証拠じゃないか。よく、そんなに有り難がられるな」

一人盛り上がる少女に冷やかに言い放ち、リーフもまた風に揺れる木立ちに歩み寄る。

少女は自分より頭一つ以上は背の高い連れの言葉に、諦めたようなため息をついた。

淡い灰色の髪と暗い闇色の瞳を持つ青年は、こういう言動で今まで度々少女の夢を打ち砕いてきたのだ。

まだまだ、世の中に夢を持っていて当然の少女にして見れば、まったく興醒めに違いなかった。

だが。

「…それで？　ここはお前の探す『天使さま』の手がかりになるといつのか、アディ？」

その、一言で。

まるで魔法のように、アディと呼ばれた少女の表情は明るくなる。

少なくとも 彼が、少女の全てを否定している訳ではないのだとわかったから。

兄妹にしては似ていない、そして少しばかり中途半端に年の離れた二人連れ。彼等の間に血の繋がりは無い。

そんな彼等の関係を一言で表すとしたらこれしかなかった。

主人と従者。

もつとも、その言葉に厳密に当てはめようとすると、微妙に違ってもくるのだが。

「うん、今回は違うよ」

微かに含み笑いを浮かべて、アディはリーフの言葉を否定した。

たちまち、リーフの細い眉が不満げにびくりと跳ね上がるが、少女は気にしない。

「見て、おきたかったの」

「これを？」

「うん。見る事に意義があるんだもん」

にこにこ笑ってそれだけ言うと、アディはまた健やかに伸びる木々を見上げた。

その様子に今度はリーフが諦めたようにため息をつく。おそらく女心は不可解なものだとも思っているに違いなかったが、アディは気に留めなかった。

何だかんだ言いながら、彼は自分に付いてきてくれる。寄る辺を失ったまだ幼い少女にとって、それがどんなに支えになっている事か。

「…『天使さま』はもういいのか」

やがて、リーフがぶっきらぼうに尋ねてくる。

『天使さま』 彼女の旅の目的。昔、自分を助けてくれた人物を、アディはずっと今まで探しつづけていた。

「そんな事ないよ。『天使さま』の事は諦めない。絶対にお礼を言わなきゃ」

今、こうして旅が出来るのも、全てその『天使さま』のお陰なの

だから。

+ + +

一番古い記憶は、一面の炎。

それが何処だったのかも、今ではわからない。その真つ只中に一人きりで立ち尽くす。

熱くて、苦しくて　痛くて、悲しかった。

渦巻く炎に行く手を阻まれて、身動きもままならず、多分あのままなら死んでいたはずだった。いや　実際、死ぬ所だった。

降りかかる火の粉と共に、天井が焼け落ちてきたのを覚えている。これで死ぬのだとか、終わりだとか、そんな事も考えられないで、落ちてくるそれを凝視する。

その時だ。

何かが、庇^{かば}うように自分の前に立ちはだかつたのは。

「駄目だ。まだ…この娘は役目を終えていない」

目に焼きついた白銀の翼。白い光と一緒に、そんな言葉が聞こえた気がする。

そして気が付くと　誰かの背に背負われて、焼け野原を歩いていた。

その時自分を背負っていたのが、今の旅の道連れの青年　　リフだった。もっとも、当時は少年と言える年齢だったに違いないけれど。

それから二人きりの旅は始まったのだ。

特に目的のない旅だったから、気が付くと主人格であるアデイの人捜しの旅になっていただけで、本当は捜す義務も使命も彼にはない。

でも彼はアデイの『天使さま』の話**を**ばかにはしなかった。

当時から鉄面皮で、おっかない雰囲気があったものの、黙って従ってくれた。

それが たとえ、他にどうする事も出来なくて選んだ道であったとしても。

今はもう、自分の両親の事も、それまでどういう生活をしていたのかも、物心つくかつかないかの子供だった時分だったからか覚えていない。

あの炎の記憶以前の事はまったくと言っていいほど残っていないかった。

だから もしかしたらそうだからこそ、アデイは記憶に焼きついた『天使さま』の記憶を正当化したいのかもしれない。

けれど、それでもアデイは捜さずにはいられなかった。

…一つの伝承を、耳にした時から。

曰く あまりにも脆く儂い生命の地上人を守護する為に、天の御使いが一人一人についている。

その姿を人は見る事は出来ないが、その御使いは生まれた時から人生をまっとうするまで、守護する人間を見守ってくれるのだという。

彼らは未来を見通す力を持ち、守護する人間をできるだけよい未来へと働きかける。

そしてもし、危機が守護する人間の生命に及んだ場合、一度だけその命を救ってくれるのだ、と。

それはある意味、とても人間にとって アデイにとっても、都合のいい伝承であった。でも、その伝承が真実なら、自分は確かにその守護天使を目にしたという事になるはず。

だが 問題は、その後だった。

一度だけ生命を守ってくれた天使は、その後は一体どうなるのだらう？

変わらず何処かで見守ってくれているのか、それとも。
一番考えられる事は、その時、天使が身代わりとなって消滅してしまふ事だ。でも…それだけは考えたくなかった。
ただ守ってもらっただけ守ってもらって、自分からはお礼の一言も返せないなど　　そんな事は悲しすぎる。

そんなこんなで、十年近くも年月が流れて。

各地を転々としながら、結局アデイ達の旅は続いている。

『天使さま』を捜し求めて。もしくは　　守護する人間を守つた後の守護天使の末路を知る為に。

永久なす縁(3)

その夜は、結局その村の跡地で野宿になった。季節的に耐えられるとはいえ、半分はアデイの我が儘で出発が遅れた為である。

ぱちぱちと控えめに焚かれた焚き火を挟んで、アデイは毛布に丸まってすやすやと健やかな寝息を立てている。

反対側に膝を立てて座るリーフは、その寝顔を無表情に眺めていた。

一体どうしてこんな所に来たがったのだろう。

そんな疑問をつらつらと考えている所で、不意に彼の表情は硬いものへと変わった。

「　　こんな所にまで来たか」

低く呟いたその刹那、リーフはいきなり横に置いていた愛刀を手にして立ち上がった。

パチリ、と薪が小さく爆ぜた音。それを合図に彼は動いた。

彼らを囲む木々の向こうに、気配を断った複数の人間がいる事を、リーフは感じ取っていた。

向こう側はおそらく彼が気付いたとも思っていないだろう。

実際、見事なまでに彼等は周囲の気配に同化していた。おそらく、普通の人間ではまったく感知できない程に。

だが　　向こうにとつては不幸な事に、そして彼にとつては幸いな事に　　彼は、ただの人間ではなかった。

この十年近くの年月、生死のぎりぎりの線を戦い、そして勝ち取ってきた叩き上げの戦士だったのだ。

もちろん、当初は人を切る事すらままならなかった。

それが周囲にまぎれた気配まで感じ取れるほどのものになったのは、おそらく元々の才能もあったのだろう。

けれど　　慣れと、守るべきものがある責任とが、未熟で無力

に等しかった少年をそこまで成長させていた。

「…あいつには、指一本触れさせない」

ぼつりと漏らし、その言葉が終わらない内にリーフは剣を抜き払う。

その音で、相手はようやく彼が彼らに気付いている事を悟ったようだった。慌てたように身構えるその姿を目に捉え、青年は薄く笑う。

普段見せる事のないその笑みは傲岸で　　研ぎ澄まされた刃のよう。それは不思議と彼に似合っていた。まるでそれこそが彼の本質であると告げるかのように。

「…遅いんだよ」

何処か自嘲するような口調で言い放ち、彼はその剣を思うがままに振るった。

+ + +

長いようで短い時間が過ぎた後。

そこには、いくつかの血溜まりと苦痛に呻く数人の人物、そして返り血すらもほとんど浴びずに立つ青年の姿があった。

「…貴様…何者だ…？」

濃密な血の臭いに顔を顰めたリーフに、傷付いた男達の中でも主犯格らしい人物が尋ねる。四十の齢に差し掛かりかけた、壮年の男だ。

先程リーフに切り裂かれた腕を抑え、憎々しげに睨んでくる。

周囲に倒れ、あるいは膝をつく男たちもまたそれぞれ軽傷といえない傷を負っているが、死者は一人もいない。

「お前のような使い手があるなど…情報はなかった。傭兵か？」

「……」

暗がりの中、それでもリーフの目には彼等が自分を恐怖の目で見ている事がわかった。

「…そうとも言えるし、違うとも言える」

しばらく沈黙した後、それだけ答える。もちろん、相手がそれで納得しないだろう事は目に見えてわかっていたが。

「どういう意味だ！」

「お前達には、関係のない話だ。…とつとと、帰る事だな。そのままだと命の保証は出来ないぞ」

忠告めいた言葉だったが、その言葉の半分も思いやりのない口調でリーフは言い放つ。

「もう、十年にはなるんだぞ。どうして放っておいてやれない。ただの子供がそんなに怖いのか」

「…貴様は、あの娘が何者か知っていてそんな事を言っているのか？」

男は乾く唇を湿しながら、重々しく愚問を問い掛ける。

「あの娘は旧アディア王家の生き残りだ。残党は全て排除すべし

でなければ、たとえ本人にその気がなくとも、いつ、誰が担ぎ上げて反乱を起こすか……！」

「…それがどうした」

付き合いきれないとばかりに、言葉を遮る。

無表情なその顔に、例の冷ややかな笑みが浮んだ。ぞくりと背を走った寒気に、男は言葉を飲み込む。

たかだか二十歳そこそこの青年に気圧されたのだ。

「そんな事、俺には関係ない。もちろん、あいつにもな。あいつはもう、アディアライト「ケイナ」アディアじゃない。ただのアディだ。

…それ以外の何者でもない」

「詭弁を……！」

「ならばお前は、全く自分の記憶にない事まで責任が持てるのか？ あいつは王女だった頃なんてまったく覚えてないんだ。王女だった時代よりも、ただのアディとして生きてきた年数の方が余程長い。自身に自覚もないのに、誰があいつを失われた王女なんて言いだすものか」

「く…っ。で、では何故貴様はそんなただの小娘をそこまで庇う！
？ それこそ、王女だと認めているからでは」
「ぐちゃぐちゃうるさいな」

つい、とリーフは剣を持ち上げて男の首筋に向ける。反射的に身を竦めた男に、彼は取り付く島もない言葉を投げた。

「…王女だろうと、そうでなかるうと関係ないのさ。あいつは…俺が守るって決まってるんでね」

「な…っ？」

男の顔が理解出来ないと物語る。それを見て、リーフは微かに自嘲するように唇を歪めた。

誰かに理解して貰いたいなど思わない。誰かに信じてもらう必要もない。

そう思う事は事実なのに、この頃、誰かが囁く。

『本当にそれでいいのか』と。

「…あいつを守っているのは、義務だ。それ以外の何物でもない…」

雇われたのでもなく、自分の自由意志でもなく。そう、決まっていたのだ。

あの少女がこの世に生を受けた瞬間に。
そのはず、だったのに。

…いつからだろう。義務感よりも使命感の方が勝ったのは。

役目だと思っ前に、自らを挺ていして守ってしまうようになったのは。

+ + +

全てが終わった後、再び元の場所へと戻ると、まだ焚き火の勢いは衰えず、少女は変わらずに安らかに眠っていた。

何か楽しい夢でも見ているだろう、微かに口元に微笑みが浮んでいる。

今となつては彼女がどんな夢を見ているのかもわからないが、彼女が悪夢を見る回数が確実に減った事に安堵する自分がいる事にリーフは気づいていた。

まだ、彼が自分の身を守るのも覚束なかつた頃。

闇の中に身を隠しながら眠るアデイは、いつも身を小さく固めて、^{うな}魔される事も多かつた。

時間が彼女の記憶から生々しさを消し去り、傷を癒してくれたのだろう。

結局の所、リーフに出来るのは執拗に放たれる刺客から守り、少しでも安らかな眠り享受できるように祈る事だけだ。

もうあの時のように、力と引き換えに命を救う事は出来な
いから。

生まれた瞬間から共にある事は変わらない。でも、もうアデイが探し求める『天使さま』は何処にもいないのだ。

アデイライト「ケイナ」アディアの守護天使・リフェイは、あの炎の夜に死んだのだから。

今、ここにいるのは天使としての格を失つた、ただの男。
いつか。

アデイはこの事実を知る事となるのだろうか。

その日を思うと、リーフは恐怖にも似た感情を感じる。

無邪気に『天使さま』を探すアデイを、微笑ましいと思う反面どうしても考えずにはいられない。

先を見通す事が適わなくなつた自分は、一体何処まで彼女と共にあり、一体いつまで彼女を守ってゆけるのだろうか。

永久なす縁（4）

ゆらゆらと揺れる葉陰。

朝の柔らかな陽射しで、目を覚ます。

爽やかな空気が胸に流れ込み、すつと眠気が去っていく。

木立ちとは言えども、やはり木々に囲まれた場所はやっぱり空気が違う。そんな事を思いながら、アディは身を起こした。

「…起きたのか。早いな」

すぐ目の前で、いつもの鉄面皮でリーフが朝の挨拶代わりに言葉をかけてくれる。

「うん、おはよう」

これは物心つく頃から、つまりリーフと二人きりの旅が始まってから続く恒例行事。

目を覚ませば、すぐに手の届く場所にリーフがもう起きていて、また何事もなく一夜が過ぎたのだと思う。

今までずっと　そしてこれからも、こうして朝を迎えられたらいいのに、とアディは何となく思う。

定住する場所はなくとも、安心出来る誰かと一緒なら、どんな場所でも家のようなものになる。

それは、この十年近くの年月でアディが辿り着いた一つの真理だったから。

「これから、どうするんだ？」

リーフが朝餉の為に、昨日の焚き火の残り火で湯を沸かしながらぼつりと尋ねる。

「…そうだねえ。次は何処に行こうか」

この村の跡地へ来る事で、取りあえず昨日までの目的は果たした。今日からの目的地を決めなければならぬだろう。

行き先を決めるのは、いつの頃からかアディの役目になっていた。「…いつそ、国境を越えてみる？」

思いついたようにアディは言う。

「国境を？」

「うん。だって…これからまた旧アディア内をぐるぐる回っても、大して情報も目新しいものじゃないだろうし。…どうかな？」

首を傾げて伺いを立てるアディをしばらく無言で見つめて

やがてリーフは、やれやれといった表情で口を開いた。

「…仕方ない。確かにここにいっても…何の得にもならないしな」

「じゃあ決定！ 次の目的地は…取りあえずここから一番近い国境ね…！」

まるでちよつとそこまで遠足にでも行くような明るさでアディは締めくくると、身近な荷物を整理し始める。それをしばらく眺めていたリーフは口元に微苦笑を浮かべて、朝食の用意を整えた。

それぞれがそれぞれの出来る事を。

少しずつ、その役割分担を変えながらも二人はそうしてやってきたのだ。

そして そんな日常がずっと続く事を、どちらも願っていた

……。

+ + +

「…そう言えば、アディ。結局こんな所で来たのは何の為だったんだ？」

干し肉とその辺の食べられる木の芽で作ったスープをよそいながら、リーフが思いついたように尋ねると、アディは不意を突かれて驚いたのか、ただでさえ大きな目をきよとんと見開き やがて、何故か顔を赤くしてしどろもどろに答えた。

「え、えと…今後の…旅の安全祈願、というか何と云うか」

「…は？」

アディの歯切れの悪い言葉に、リーフの顔が困惑で顰められる。

「よくわからないんだが。何だ、その…安全祈願というのは」

「う、だ、だからっ。ここの木にね、願うといいつて聞いたの！！
もう、いいじゃない！ ほら、さっさと食べて出発しよっ！！」
一方的に話題を断ち切って、アディは熱いスープを無理に口に流
し込み、四苦八苦しなから飲み込んだ。

その様子にこれは何かを隠しているな、とは思いながらも、リー
フは敢えて問い質す事はしなかった。

本当に何か重要な事だったら、アディはきつと話してくれるだろ
うし　話さないという事は、それ程深刻な事ではないという事
だろうと結論したからだ。

それに、子供子供と思っていたアディも、そろそろいわゆる『お
年頃』なのも確かな事だ。

それなりに秘密を持ちたがる年頃だろうし　自分が抱えてい
る大きな秘密に比べたら、きつと他愛のない事に違いなかった。

+ + +

旅立ちの用意を整え、最後にアディはかつての村の中心、そこに
集う常緑の源の幹に手を触れた。

少し離れた所でリーフが待っている。

常緑　永遠の象徴。

ちよつと以前に立ち寄った村で耳にした。この木に願いをかける
と、冬でも葉を落とさないでずっとその緑を保つように、願いも生
き続けるという。

…願掛けの木。

(どうか　ずっと、リーフと一緒にいられますように)

『天使さま』が見つかったも見つからなくても、この願いはきつ
と変わらない。

恥ずかしいから…もう子供の頃みたいに堂々と口に出来ないから、
わざわざこんな所にまで来た理由は言えないけれど。

「アディ、もういいか？」

「うん、…行こう!!」

最後にもう一度強く願って、アディは幹を離れ、小走りに彼女を待つ道連れの下へと駆け寄る。

今ではただの青年と少女でしかない、元天使と元王女を、常緑樹は静かに見送った。

永久に変わらぬ、緑を揺らして。

永久なす緑（４）（後書き）

HPのキリリク「天使もので！」にお応えした物語です。

組み合わせ的には王道といえは王道の二人ですが、途中で自己主張し始め、それに沿って話を作っていたら短篇レベルじゃなくなっていた、と。

わたしにはよくある事です……。

「天使もの」のリクエストなのに、天使が天使としてほとんど登場していない妙な話ですが、自分ではちよつと気に入っています（笑）アディとリーフの旅はまだ続きます。

今後の物語にもよろしければお付き合い下さい。

失われた翼

もう、この背に翼はなく、未来を見通す瞳もないけれど。

+ + +

「ご、めんね…リーフ……」

ベッドの中から、そんな情けない声がする。

すっぱり毛布を引き被ってしまったので表情は見えないが

多分、隠れた顔は声以上に情けないものに違いなかった。

「…何を謝る」

実際、本気でそう思ったので彼 リーフはそう尋ねたのだが、

彼女はそう受け取らなかつたらしい。

「だ、だ、って……あたしが、風邪とかひいたから……」

「…？ だから、それはどうしようもない事だろう。謝る暇があったらさっさと寝て治せ」

「は…はい……」

いつもなら食ってかかってくる所も、今日はしおしおとした返事だけが返って来る。

…ひよっとして、泣かせてしまっただろうか。

一瞬、最悪の事態を想像し、咎めるつもりは全くない事を伝えなければと思うのだが、それでも彼の口からは優しい言葉の一つも出て来ないのだった。

代わりに出てきた言葉といえば。

「 熱があるのに黙っているからこうなるんだ。熱が下がるまでは部屋を出るな」

その後、「治るまでは何も考えなくていいから、とにかく身体を休めるように」「くらい言えていればまだマシだろうに、彼はそこまで言わない。

元気な時なら気にしない彼女も、気弱になった時にそう言われてしまったらどうしようもない。

再び泣きそうな声で「はい……」と毛布の下から答えるだけだった。

+ + +

彼女 アデイと共に旅を初めて一体何年になるだろうか。

泣いていたばかりの子供が、自分の意志で目的地を決定できるほどに時間は経ったというのに、彼の口下手さは、一向に改善の余地を見せない。

彼も身長はずっと伸びたし、肩幅も広くなった。力も、必要最小限の筋肉だつてついただろう。

何処からか放たれる刺客達と渡り合えるほど、剣の扱いも身に着いた。

なのに、そういう部分はいつまでも変わらないのはかえって不思議な事だった。

リーフ自身、どうして自分はいつまでも変わらないのかと疑問にすら思うほど。一緒にいるアデイに至っては、どう思っているのやら皆目見当もつきはしない。

冷たい、と思われているかもしれないし、苦手だ、と感じているかもしれない。

彼が彼女の恩人で、守り手だから一緒に旅をしているのかもしれない。なかった。

もしくは。

自分が、彼女の最終目的であるのだと、無意識の内に気付いているからかもしれない。

最終目的 彼女の命を救ってくれたという守護天使。その、なれの果てであると……。

+ + +

人間には一人一人、天使が守護している。

それは、人間という生き物がこの世に誕生した時から決まってい
る理^{ことわり}。天使にとって、人間を守護する事は生まれた意味と同義では
あるが、それ以上でもそれ以下でもない。

あくまでも義務であって、好きだからとか、気に入ったからとか、
そついう感情など挟まる余地はないのだ。

現に天使の大半は自身の守護する人間に対して驚く程に淡白であ
り、無関心でもある。

守り、可能な限り『善い』方向へ導く事は行っても、それ以上の
干渉はしない。

墮落に進んだ人間の守護天使が仲間内でも蔑^{さげす}まれるが故に、彼等
は人間をより善い方向へと導こうとするのだ。すなわち、自分
自身の為に。

もちろん、自身が守護する人間を心から大切にする者も、まった
くない訳ではない。しかし、その数は圧倒的に少ないのだった。

…そして、リーフも大多数の天使と同様、自分の守護する人間
アデイライトにはほとんど関心がなかった。

…あの時までには。

+ + +

未来を見た。

炎の中、蹲^{ひざま}る守護の対象。アデイライト。

小国アディアの王家に生を受け、その死の間際まで家族の愛情に
包まれて育つ。

素直で、純真、でも好奇心は旺盛。王女にしては、多少元気が良

すぎると周囲は思っているが、それもまた愛すべき点だとも思われている。

アデイライトのことなら、望めば過去も未来もわかった。

このまま放っておけば、戦乱の中、幼い命を落とす事も。

運良く助かったとしても、全身に火傷は残り、素直だったその心根も、周囲に利用される事で捻じ曲がる。

そう、わかっていた。

守護をしている対象が死んだとしても、彼等になんの責は負わされない。ただ、また次の新しい命を見守るだけだ。

天使は人を守護すると言いながら、その一方で監視しているようなものだから。

人は愚かで、無知ゆえに無謀。世界を破滅に向かわせるのは、そうした人の行いなのだ。

人の歴史には何一つ残っていないが、今の世界はこれまでに何度も発展し滅んできた。その度にやり直すけれど、人はいつも同じ事を繰り返す。

そんな事を思っていたのに、アデイライトが落ちてきた梁はりに下敷きになる瞬間、彼は彼女を助けていた。

運命を変える。その代償は、天使としての自分。

今後何が起ころうと、自分は無力に大地と時間に束縛される。

「駄目だ」

それでも、やはりそうせずにはいられなかった。

「この娘は…まだ、役目を終えていない」

…人をよりよく、出来るだけ幸福に導くのが天使の役目だと言うのなら、彼女を生かす事が最善の方法。

死ねば全てが終わってしまうから 可能ならば、本人自身の力をもって生き延びるように。天使はいざという時に、そう仕向けるように働きかけるだけが望ましい。

しかし、その時は天使としての誇りというより、衝動的に彼は身を投げ出していた。

それが、天使リフエイが死んだ瞬間。

その刹那に、彼はその最後の力によって自身の守った少女に何かを見たが、その記憶は力を喪失すると同時に瞬く間に色褪せる。

ただ　　今までにない、充足感だけが彼に残った……。

+ + +

「おい、起きろ」

「…ん…リーフ…?」

寝ぼけ眼でアデイがもそもそと身を起こす。

やはり先程泣いていたのか、その頬に涙の跡が微かに残っていた。微かに胸が痛んだものの、慰めの言葉も思いつけずにそれを見なかつた事にして、リーフは彼女の額に手を当てる。

すっかり休んだお陰だろう。熱は大分下がったようだ。それに安心して、彼は軽くため息をついた。

「…気分は」

「あ、うん…寝てたら大分楽になった。…ちょっと、お腹空いたかな」

えへへ、と照れ臭そうに笑いながら、アデイは答える。そして急に真顔になると、ぼつりと言った。

「…足手まといだったら、置いていっていいからね」

「…は?」

思いがけない言葉に、リーフは一瞬何を言われたのかわからなかった。

それに構わず、アデイは真剣な顔でさらに続ける。

「今まで、リーフは黙ってあたしと一緒にいてくれたけど…でも、リーフにもやりたい事あるんじゃないの? もう、あたしは子供じゃないよ。一人でも、頑張れるから…だから……」

「ばかだな、お前は」

「…え?」

心底呆れて言った言葉に、今度はアデイが目を丸くした。

「ば、ばかって……」

「まだまだお前は子供だろう。自己管理も出来てないくせに、大人ぶるんじゃない」

「う……」

痛い所を突かれて、アデイが言葉に詰まった。実際に風邪で倒れた身で、確かにその言葉はごもつともしか言いようがない。

悔しそうに俯きながら、それでもアデイは反論を試みる。

「で、でも……あたし、リーフのお荷物にはなりたくないんだ……」

「だから、いつ俺がお前を『足手まとい』とか『お荷物』なんて言った？ 何処からそういう発想が出てくるんだ」

むしろ逆に、守るためにも常に側にいなければとっているというのに。

何がどうなつてそういう発想につながるのか、リーフにはまったく理解出来なかった。

そんなリーフに、アデイは思い詰めたような顔で言い募る。

「でも……！ リーフはあたしが目的地を決める度に、困った顔するんだもの……！」

「困った……顔？」

全く自覚がなかった事を言われて、リーフは困惑する。

目的地を決める役目がアデイになって久しいが、嫌だと思っただ事は一度もない。むしろ、決められた方が楽だと思う。

何しろ彼には、これという旅の目的が何一つない。なのに

自分は無意識にそれを嫌だと顔に出していたのだろうか？

「……それは気のせいだ。俺はお前が目的地を決める事に異存はないし、他にやりたい事もない」

「……本当？」

疑り深いアデイを怪訝に思いながら、リーフは頷く。どうしてわざわざこんな事を確認せねばならないのだろう、と思いつながら。

……確かに、アデイが全てを知る日が来るのは怖い。

その時、どんな目でどんな顔で自分を見るのか、それを知るのが怖いと思う。

そう思う理由を、すでにリーフは自覚していた。

「俺はアデイ、お前が必要とする間は、何があっても側にいる。最初に会った時に言っただろう？ お前を守ってやると。…望む事があるとしたら、もう少し俺に対してお前が遠慮をしなくなる事だな」
「…リーフ……」

驚いたように、アデイがその大きな目を見開く。

思った通りの事を言っただけだが、何故か今の言葉は多少なりとアデイを驚かせる内容だったらしい。

…確かに、今日はいつになく多弁な方だと自分でも思う。

普段はこちらが口を開かなくても、アデイがその分まで喋り、笑い、時に怒って拗ねるから。

そして、アデイは何だか泣きそうな顔になったかと思うと、すぐに笑顔になってぼつりと言った。

「…ありがとう」

「礼を言われる筋合いはないぞ」

困惑の表情でリーフが言えば、アデイは益々嬉しそうな顔になる。

「うん、でも…ありがとうって、言いたかったの」

「…そうか」

「うん。…心配かけてごめんね。すぐに元気になるから……」

「そうしてくれ。いくら俺でも…病気からは守れないからな」

半ば本気で言った言葉を、アデイは冗談に受け取っただらしい。

「あははっ、そうだねー」

いつもの明るい笑い声がアデイに戻る。その事にリーフはほっと安堵した。

+ + +

もう、この背に翼はなく、未来を見通す瞳もないけれど。

よりよい道を指し示し、導く事も出来ないけれど。

それでも自分は彼女と共に在るだろう。これまでのように手の届かない場所からではなく、その横を歩きながら。

これからも、ずっと。

失われた翼（後書き）

「永久なす緑」の完結後に書いた、おまけの番外編です。

リーフという元守護天使は「天使らしくない天使」を目指して生まれたキャラクターです。

無愛想で無口、何を考えているのかいまいち読めない、そういうキヤラで、実際書いてみたらちょっと梃子摺りました（笑）

どうも、リーフ自身も自分の事がよくわかっていない感さえあります……。

情緒欠落男ですが、一応それなりにアディの事は考えているという話でした。

比翼の鳥（1）

わたしはただ、失いたくなかっただけなのです。

失わずに済む術を持ちながら、みすみすあの人を失ってしまうなんて許せなかっただけなのです。

罪だとも思いませんでしたし、誰がわたしを弾劾だんがいしようとも、その時の選択を間違いだっただとは思わないでしょう。

わたしは、幸せです。

長い間夢見た事が現実になる、その幸福を知らずにいる彼等こそが気の毒だと思えます。

わたしは、幸せなのです。

この幸福が罪と言うならば、喜んでこの身に罰を受けましょう。

この身がたとえ今滅ぶとしても、わたしは決してあの時選んだ道を後悔しない。

…たとえ二度と、死の翼から大切なあの人を守る事が出来ないのだとしても。

+ + +

「…国境だ」

感慨も何も含まれない、その言葉で疲れが一気に吹き飛んだ。

「国境!？」

無意識に地面を睨んでいた顔を反射的に持ち上げると、声の主

リーフと目が合った。少し先で立ち止まり、相変わらぬ無表情で見つめてくる瞳は暗い闇の色。

その顔に笑いかけて、アディは少しだけ疲れた身体に気合を入
ると、彼に向かつて小走りに駆け寄る。

彼の横に辿り着いてから前方を見ると、確かに遠く微かにだが、
国境を示す櫓やぐらが見えた。

そこにはためく旗は鮮やかな緑と不吉さすら感じさせる黒。…現
在、この地を名実共に支配する大国の国旗と、その隣国の国旗だ。

まだこの国が『アディア』と呼ばれていた頃、そこには緑
の旗はなく、黒い旗ともう一つ、赤地に白い星が染め抜かれた国旗
が掲げられていたが、もはやその旗はこの地上の何処にも見る事は
ない。

「やつとだね！ 長かったあ〜」

感慨もひとしおなアディを横目に、リーフは淡々とした口調で言
つてくれる。

「まったくだ。冬が来る前に辿り着けて何よりだな。一時はどうな
る事かと思っただが」

「…う」

本人には悪気がこれっぽっちもない（と信じたい）言葉は、後ろ
めたい所のあるアディの耳には痛かった。

というのも、今を遡さかのぼる事十日。

今までの野宿続きが祟たたってか、それとも季節の変わり目で朝夕の
気温の変動が激しい為か、アディが風邪をひきこんでしまい、数日
間足止めを食らうという事態があったからだ。

もつとも、幼い頃からずっと旅を続けてきたアディの事だ。数日
しっかり休息を取ると、すっかり全快したのだが。

…旧・アディアの北西に連なるユーフルク山脈の冬の訪れは何処
よりも早い。

もし、雪でもちらつこうものなら、すぐにその一帯は雪で閉ざさ
れ、街道は通行止めになってしまう。

そうなると国境を越えるには、山脈を大きく迂回するか、もしくは
は春の雪解けを待つより他はない。

特別急ぐ道中ではないけれど、一月以上の長い足止めを食らうのも、寒空の下の野宿が続くのも出来れば避けたい所だ。

何より、二人には一月も宿を取り続ける程の路銀などない。だからこそ雪が降る前に、何としても国境に辿り着き、西の大国と呼ばれるマザルークに入る必要があったのだ。

「…無事に着けて、良かったよ……」
心の底からそう思う。

国境さえ越えれば、雪に足止めを食わずに済むし、当初の目的
国境を越える、も達成される。数日の時間を取り戻す為に、
今まで以上に道中を急いだ甲斐があったというものだ。

「国境近くに街があるって話だったが…今日はそこで泊まりだな」
アデイとは対照的に、何処までも感情を感じさせない声音でリーフが言った言葉に、アデイの目は輝いた。

「…久し振りに屋根のある所で眠れる……！」
「……………」

胸の前で両手を組み、普段なら祈りもしない何かに感謝するアデイを胡乱ごらんげ気に見つめ、リーフはこっそりため息をつく。

十代中頃の少女が目を輝かせて言う台詞としては、あまりにも悲しい台詞だ。

だが、リーフとしても流石に連日の野宿は身体に堪える。何しろ、夜の森は何かと物騒な上に、連れはまったく自覚がないものの、一応は年頃の少女だ。

そして その身に、大きな秘密を抱えている。

二重の意味で彼女を守る為に気を張り詰めねばならない為、肉体的なものより精神的な疲労が彼を苛さいなみ始めていた。

(…もし、これが本来の運命のまま生きていたなら……)
時折、リーフは考える。

仮定するだけ、無駄だと思いつながらも。

(野宿や…凍えたり、飢えたりする事など、なかったはずだ)
本来アデイに与えられていた人生は、こんな風に特に当てもなく

流離さすいうようなものではなかった。その代わり、とても短いものか淋しいものになっていただろう。

そう…何事もなかったなら、国境を越える事などなかったし、こうして旅などする事もなかったのも確かだが、こうして伸び伸びと日々を生きる事もなかったのも、また事実だ。

そう考えると、人の一生とはほんの些細な事で生き方がまったく変わってしまうものだと思う。

「…リーフ？ どうしたの、行かないの？」

怪訝けげんそうなアデイの言葉で、思考の海から浮上する。

「何でもない。…行こう」

「？ 変なの」

アデイは何処となくすつきりしない顔だったが、追求はして来ない。その事に内心ほっとしながら、リーフは足を動かし始める。

『もし』を考えてもどうしようもない事だ。もう運命は動き出してしまっているし、過ぎ去った時は戻せない。そうする術も、ない。

そう あの時、アデイの運命を変えた時に、彼の運命もまた大きく変わってしまったのだから。

+ + +

この世界において、人間には一人一人それぞれ違った天使が守護している。

彼等の姿は守護の対象となる人間の目には、決して見える事は無い。そして、彼等の言葉もその耳に届きはしない。

それでも彼等が人々を守護するのは 過去に何度も滅亡を繰り返す原因となった『人間』を監視する為だ。

守護する人間を出来る限り『善』へと導くのも、ひとえにそれが世界の調和を担う彼等に課せられた義務だからで、普通は天使は自らの守護する人間に対して特別な意識など持つ事もない。

ただ対象が墮落した場合、彼等自身にも責を問われるが故に、守

護をしていると言っても過言でないのだ。

…それでも、ごく一部の天使は自ら守護する人間を慈しみ、親しむ。だが、そんな彼等は天使の中でも変わり者として見られ、ばかにされる事も多いのだった。

リーフ　天使・リフェイもかつては義務だけで守護をしていた。過去に何人もの人間を見守ってきたが、その運命に参与する事など数える程だった。

無駄だと思っていたし、人に心を砕くなどとても理解出来なかった。

個人単位でなら、確かに善人と呼べる者は少くない。しかし、結果を見たらどうだ。結局、一握りの墮落した人間によって、世界は何度も滅びかけたではないか　と。

そう、思っていたのだ。人に必要以上に関わるなど、愚の骨頂だと。

最後に守護した、今は滅んだアディアの王女…アディライト…ケイナ…アディアの運命の瀬戸際までは。

比翼の鳥(2)

国境に接する街・トワルに二人が辿り着いたのは、冬の早過ぎる夕暮れ時の頃だった。

方々から夕餉の支度する匂いが漂い、必要以上に食欲を刺激する。「ねえねえ。今日は何処に泊まる？」

国境に接するだけに、宿はいくつも軒を連ねている。そのどれもが立派で、相当にこの街が潤っている事が伺えた。

暖かい食事と屋根の下で眠れる喜びに顔をほころばせるアデイに對して、リーフは相変わらず嬉しいのか不機嫌なのかわからない無表情で周囲をぐるりと見回す。

確かにこれだけあればよりどりみどりだが、国境を越えるには通行証を発行して貰わねばならないし、これだけの規模の街となると発行に数日かかる可能性もある。

さりげなく入り口に書かれた宿代を見て回ると、予想通りと言うべきか、今まで泊まってきた宿よりいくらか高めに設定されていた。

…これでは、一日二日で済むのならないが、数日以上になるといささか懐具合が厳しい。そこまで確認してから、ちらりと視線をアデイに向け、リーフは淡々と言い切った。

「…少なくとも、この辺りの宿は無理だな」
「えっ」

ガンツ！、と後ろから頭を殴られたかのような顔になると、アデイはようやく現実を直視する気になったらしい。

慌てたように周囲をぐるりと見回して　そしてリーフの言葉が正しい事を悟ったのか、はあ、と重いため息をついた。

「うっ… やつと休めると思ったのに」
そのままへなへなと崩れ落ちそうな雰囲気で嘆き、アデイは傍目でもはつきりとわかる程に肩を落とす。

何しろここ数日というもの、強行軍と言っても差し支えない道

中を来たのだ。いくら若いアデイでも疲労は相当に溜まっていた。ついでに今日は昼もろくに食べていない。空腹感も最高潮に達しかけていた。

「仕方がないだろう。…他を探そう」

「…うん、そうだね」

珍しく何処か励ますようなリーフの言葉に、アデイはまた笑顔を取り戻す。

これだけの街だ。探せば二人が数日泊まれるくらいの宿が何処かにあるに違いない。

楽観的にそう考えると、アデイはよし、と気合を入れた。まだ完全には周囲は暗くなっていない。今から頑張ればきつと見つかる。

そんなアデイを相変わらず何を考えているのかわからない顔でリーフが見ている。…一人じゃない。だから、きつと何とかなる。

「…へへっ」

そう思うと何となく嬉しくなつて、つい笑みが零れる。

一人ではないって、なんて嬉しい事なんだろうと思う。が、

そんな事を思っているなど当然わからないリーフは、いきなり笑ったアデイを薄気味悪そうに見つめるばかりだ。

「じゃ、急いで探そう!」

「…ああ」

そして二人は宿を求めて、街の雑踏へと足を踏み出したのだった。

+ + +

「きゃわっ!?!」

宿を求めてトワルの街を散策し始めて間もなく、リーフの背後でアデイの奇声が上がった。次いでドサリ、と何か物が落ちるような音が重なる。

「…アデイ?」

また躓いたか、それとも人にでもぶつかったかと背後を見たリー

フは、予想通り地面に転がっているアディを発見して思わずため息をついた。

丁度、街の中心部にあるバザールの入り口付近に辿り着いた頃だった。

夕刻ながらも、そこで夕食を済ませる者、日用品を買い揃える者、明日出発するのか、その装備を整える者など、行き交う人の数は街の入り口の比ではなく増している。

決して鈍臭い訳ではないのだが、アディには『誰も躓かないような段差に足を取られる』という自慢にならない特技を密かに持っていた。

「…あ、たたた……」

今回は顔面からやったらしく、そろそろと持ち上げた顔の中で、鼻の頭が早くも真っ赤になっていた。当然目は涙目になっている。

「大丈夫か？」

もはや見慣れた状況に、リーフは全く動じずに明らかに義務感と言わんばかりの口調で安否を尋ねる。

そしてそんなリーフの言動にやはり慣れていているアディは、顔を顰めたままながらも、よろよろと立ち上がった。

「うー…、痛い……」

動きやすさを重視した、膝丈のズボンとブーツの間でむき出しになっていた膝が、痛々しく擦り剥けて微かに血が滲んでいる。

それを目に留めて、ようやくリーフは動いた。

「…まったく。ちゃんと足元を見ていないからだ」

眉間に皺を刻みつつ、アディの服の裾に付いた泥汚れを乱暴に叩き落としてやると、アディは打ち付けて赤みを増した顔を更に赤くした。

「だ、大丈夫だよ。自分でやるから……！」

言いながら自分でも慌てたように服に付いた汚れを叩く。

子供扱いされたのが嫌だったのだろうか、とリーフは思い、それ以上の手を出すのはやめにした。

何しろ色気の欠片もないが、それなりに年頃の少女である。つまり…一番扱いに困る年頃な訳だ。

必要以上に子供扱いすればむくれるし、かと言って大人と同様の扱いをするには幼過ぎる。正直、時々どう接すればいいのかわからなくなるのだ。

「…傷を洗った方がいい。何処かに水場がないか探して来よう」

ちゃんとした手当ては宿が決まってからの方がいいだろうが、応急処置はしておくべきだろう。そう思つての言葉だったが、アディは驚いたように首を振った。

「いいよ、大丈夫！ これくらい、平気だから！」

「…だが……」

「本当に大丈夫！ 宿を探そう」

「…わかった」

傷もぶつけた顔も痛いだろうに、必死に言い募るアディに釈然としないものを感じつつも、結局リーフはアディの言葉を受け入れる事にした。

一見した所、似ていない兄妹にも見える彼等だが、実際の主導権を握っているのはアディなのだ。旅の目的地を定めるのも、何らかの選択をするのも。

彼等の関係は主従関係のそれに等しい。主はアディで、従属はリーフ。それは彼等が共に旅を始めた時に決まった関係だった。

「その代わり、宿についたらしっかり消毒するからな」

「…う。仕方ない…耐える」

「……」

釘を刺すようなリーフの言葉に一瞬顔を強張らせたアディだったが、それでも宿を探す方を優先した。

余程空腹が疲れているのだろう　そう判断したリーフは、多少妥協してでも宿を確保する事を密かに決意した。

…アディの為に。

比翼の鳥(3)

(ああ、またやっちゃった……)

先に行くリーフの背中を見ながら、アデイは自己嫌悪に陥っていた。

自分でも時々嫌になる。普通だったら躓きもしないような所で転ぶ、この鈍臭さ。きつと、リーフは呆れ果てている事だろう。

…小さい子供の頃と変わらない自分。

アデイはアデイなりに、リーフの迷惑にならないように、足手まといにならないようにと気をつけているつもりだけど、その努力が実を結んだ事はほとんどない。

大衆の面前で転ぶ恥ずかしさよりも、リーフに呆れられる方がよっぽど怖い。

何しろ アデイには、頼れるものが彼の手しかないのだから。
(…困った奴だ、とか思われたかな……)

先程擦り剥いた膝はじくじく痛みを訴える。これはきつと、消毒の時すさまじく痛む事だろう。

それでも宿探しを優先したのは、彼に余計な手間をかけたくなかったからだ。

リーフがいてくれたから、今まで生きて来られた。

リーフがいるから、アデイは前に進める。…独りでないから。

だからいつも恐れている。決して口にしないけれど、彼がいつか自分の側からいなくなってしまう事を。

最初に出会った時、アデイは物心つくかつかないかの頃で。焼け野原の中に蹲って、何が起こったのかもわからず、震えながら途方に暮れていた。

頭の中が真っ白で、どうしていいのかわからなかった。そこに彼が現れて　そこから自分を連れ出してくれたのだ。

背負われて進んだ、焼け野原。あの時から今のアデイの記憶は始

まっている。あの時感じた安心感は、今もまだ思い出せるほど。
その後、シヨックのせいにかくくに口を利く事も出来なかったアデ
イに彼は言ってくれた。

『大丈夫。俺がお前を守ってやる』

今でもよくわからない。

どうして彼が、初対面の自分にそんな言葉を言ってくれたのか。
そして、今も律儀にその言葉を実行しているのか。

何度か聞こうとしたけれど、結局怖くて聞けなかった。

もし尋ねて、そうした事で今の関係が壊れてしまったら、と思う
と。

それ以前に、自分は彼の素性を知らない。名前の他に個人的な事
は何一つ。アデイと出会う前、一体どういう生活をしていたのかさ
え。

気にならないと言えば、嘘になる。それでも今まで尋ねられなか
ったのは、自分にも似た部分があるからだった。

…リーフに会う、その前。自分を助けてくれた『天使さま』を見
る以前の事を、アデイは何一つ覚えていないから。

自分にだって両親がいたはずだけど、彼等の顔も存在も何故か思
い出せないのだ。

…薄情かもしれないが、そのお陰で逆にリーフと二人きりでも淋
しさを感じずに済んだのだけれども。

だから聞かなかった。自分が聞かれて困るように、もしかしたら
リーフも困る事情があるかもしれない、そう思って。

(いつまで一緒にいてくれるのかな)

出会ってからもうすぐ十年。

いつ終わるとも知れない、当てのない旅。そんなものに、彼はい
つまで付き合ってくれるのだろう。

いつまでもこのまま一緒に居られたらいいのに

そう思う事

が、一種の我侭である事をアデイは自覚している。

もう、自分も誰かに守って貰わないと生きて行けないような子供でもない。彼を付き合わせる理由も、彼が付き合う義務も、何処にもない。

だからもし、リーフが一言『もうここから先は付き合えない』と言えば、そこで彼との旅は終わるのだ。

そんな事態を想像して、アデイは思わず唇を噛み締めた。

想像だけで、こんなに淋しい。でもいつか必ず、その日は来る。

『永遠』がこの世にない事はアデイにもわかっていている事だから。

だからせめて、その日が一日でも遅くやって来るよう祈らずにはいられない。まだ覚悟が出来ていないから。一人ぼっちになる事を受け入れる準備が出来ていないから。

どうか、あと少しこのままです。

+ + +

その後何件かの宿に当たったものの、すでに満室だったり、法外な宿代だったりで、なかなか適当な宿が見つからなかった。

もうすでに日は暮れ、周囲は闇に包まれている。

街の中心部と旧アディア側は見て回り、後はマザルーク側が残っているばかりだ。…が、流石にこれ以上歩き回るのは無駄に体力を消耗しかねない。

「……」

リーフはちらりと視線だけアデイに向ける。弱音は吐かないが、その顔にはやはり疲労が見え隠れしていた。

それも当然だろう、この街に来るまでにすでにそれなりの距離を歩いて来たのだ。

しかも先程擦り剥いた怪我は、滲んだ血こそ乾いたようだが応急処置すらしてない。そんな状態では歩いているだけでもそれなりに痛むに違いなかった。

「…アデイ……」

今日は妥協して、多少値が張つてもそこらの宿に決めてしまつか。そう結論を出しかけたその時だった。

「…え…まさか、リフエイ……!?!」

周囲を行き交う人の波。

そこから突然、そんな声が投げかけられた。

「…!?!」

瞬間、弾かれたように彼は声の方に目を向ける。

聞き間違いでなければ、今の声は確かに彼の名を口にした。彼の

『天使』であつた頃の名前を。

横で何も知らないアデイが不思議そうに彼を見ている事にも気づかず、彼は声の主を捜した。やがてそれが通りの反対側に立つ、彼とそう年の変わらない女性のものだという事に気付く。

亜麻色の髪に焦げ茶の瞳を持つその若い女は、驚愕もあらわに彼等 否、彼だけを見つめていた。

信じられない、と雄弁に物語る表情は、やがて何処か懐かしげな色を帯びて。

「…リーフ、知り合い……?」

困惑を隠さないアデイの言葉に我に返った時には、彼女は彼等の目前にまで近付いていた。

「久し振りね。…わたしの事、覚えてる?」

「……」

咄嗟に返事が出てこなかった。

何と言つていいものか、わからないまま取りあえず頷く。

忘れられるはずもない。彼女の事はよく知っていたし、覚えていた。何故なら。

「…笑いたければ、笑え」

苦い思いでようやく紡いだ言葉に、彼女はただ微苦笑を浮かべるだけだった。

「リーフ…知ってる人なの?」

余裕の無い気持ち、アディの言葉が和らげる。

…そうだ、この場にはアディがいたのだ。何も知らない、彼女がようやく現実を思い出すと、リーフは何処か不安そうなアディに答えた。

「昔馴染み、だ」

「こんにちは…あつと、夜だからこんばんは、ね」

彼女はリーフの動揺など知った事ではないかのように、にっこりとアディに笑いかける。

「わたしはフレル。あなたは？」

「え…あ、アディ、です」

「そう。よろしくね、アディ。あ、わたしの事もフレルって呼んで言いながら、彼女はちらりと彼に視線を投げる。

彼にもそう呼べ、と暗に仄めかしている事はすぐにわかった。言われずとも、彼女の『名』を口にするつもりなどなかった。

…その名は、彼の『リフエイ』同様、もうこの世の何処にも存在しないものだから。

「あら…アディ、怪我してるの？」

どうやって彼女　フレルを追い払おうかと思っていると、目ざとく彼女がアディの膝の傷に気がついた。

「駄目じゃない、傷が汚れたままだし…」

言いながら目はリーフを非難がましく睨んでくる。

実際彼女の言葉は事実で、リーフは黙って非難を受ける体勢だったのだが、その言葉に反応したのは当事者のアディの方だった。

「違うの！　リーフは悪くない、あたしが…宿を先に探そうって言ったの！」

驚いてアディを見れば、焦ったような顔をフレルに向けて訴えている。

思いがけない反撃に、フレルが目を丸くし　やがてその顔に微笑が浮かんだ。そして。

「やだ、可愛いー！」

「!？」

あ、と思った次の瞬間。フレルは人目を気にせず、アディに抱きついていた。

ぎよつと目を見開くアディ。やがてその目は助けを求めようというふうに向けられたが、彼にはどうする事も出来なかった。

「わたし、あなたみたいな素直な子って大好きよ」

「え、えと、あの……っ？」

「よし、決めた！」

目を白黒させるアディに構わず何やら勝手に決心すると、フレルはアディから身を離し、満面の笑みでこう告げた。

「宿を探してるんでしょ？ だったらわたしがとびっきりの宿を紹介してあげる！」

比翼の鳥(4)

こっちこっち、と何処となく楽しげなフレルの先導に従って、アデイとリーフはその後に続いていた。こちらは二人とも居心地の悪そうな顔だ。

リーフが不機嫌そうな顔をしている事は珍しくもなんともない事だが、アデイがそういう表情をしているのは非常に珍しい。

正直、リーフとしてはあまり彼女とこれ以上の関わりを持ちたくはなかったのだが、アデイの傷の手当てもしたいし、彼女の申し出を断る十分な理由が思いつけなかった。

対してアデイと言えば、彼とフレルの繋がりがわからないせいか何処となく不安な顔をして、時折ちらちらと二人を見比べている。リーフが黙って付いて行っている事で、フレルの事は信用に足る人物らしいと思っっているようだが、恐らく三人の中で一番状況に付いて行けていないのはアデイに違いなかった。

そんな不安が手に取るようにわかるのに、フレルとの関係を説明するうまい言葉が見つからない。

『昔馴染み』と先程は答えたが、今となってはあの時に人違いという事しておくべきだった、と今更リーフは後悔した。

何しろ アデイと共に行動するようになる以前の知り合いという事にしてしまったら、その頃の事について説明をしなければならなくなる。

今まで興味がなかったのか、それとも聞かずにいてくれたのか、アデイから出会う以前の事について尋ねられた事はない。

だが 昔の知人が現れた今、その頃についての質問がいつ出てもおかしくない状況になってしまった訳だ。

(…失敗したな)

自業自得という言葉を噛み締めつつ、アデイの不安を解消してやれない自分を、心の中で自嘲する。

こつなつたら後は相手　フレルの出方を待つしかない。彼女がどういつつもりで関わってきているのかはつきりさせない限りは下手な事は出来ないし、言えない。

…不様だと思う。以前の自分だったら、アデイが不安に思おうが、疑惑を抱こつが気にも留めなかつたに違いないのに。

でも…今は。

夕闇に足元の道が覚束なくなる。フレルの足はどんどん街の外れの方へ向かつていて、同時に周辺の闇は濃くなる一方だ。

またアデイが躓く事がないように注意しつつ、リーフは腹を括る。

（もし…今回の事で俺の過去がアデイに知られるようになっても…）

その時、アデイがどんな反応をするのか…考えるのも辛い。

拒絶するだろうか、それとも受け入れてくれるのか。どちらの反応を取るか、今の段階ではまったくわからない。

…それだけアデイの存在はリーフの心を占めている。それはもう、誤魔化し様のない事実だ。

（アデイが俺から離れるような事になっても、最後の最後まで自分を見失わないようにしよう……）

出会ってから今まで、ずっと騙し続けてきたようなもの。嘘を嘘で固めて、理由をこじつけて側に居続けたのは自分の我侷だ。

真実が明らかになった時、自分の居場所がなくなつたとしても自分にはそれを受け入れる事しか出来ない。

「…わきゃ！」

そんな事を考えていると、案の定、アデイはまた小さな段差に足を取られてつんのめつた。

今度はすかさずその腕を掴んで転倒を防ぐと、アデイは衝撃に強張つた顔のまま、小さく『ありがとう』と礼を言う。

いつもの事だろう、と言いかけて　結局彼は何も言わずにその手を離れた。代わりに口にしたのは……。

「…礼はいいから、気をつける」

いつもとは違う、何処か案じるような口調のリーフの言葉に、アデイが驚いたように目を丸くした。そして嬉しそうに笑うと、うんと頷く。

「大丈夫？ アデイ」

アデイの奇声のせいか、先に行くフレルも驚いたように声をかけて来る。

「あ、だ、大丈夫です！」

「暗いから足元気をつけてね。その足でまた転んだら大変」

「はは…そうですね」

フレルの言葉に照れ笑いを返し、アデイはようやくいつものような朗らかさを取り戻したようだった。

その大きな瞳から先程まであった不安が消える。そのままその目は隣を歩くリーフに向けられて。

「転びそうになったら、またリーフが助けてくれるよね？」

につこり笑って言われた言葉は、普段の屈託のない口調。リーフは内心ほっとしながらも、結局いつも通りの受け答えを口にした。

「気が向いたらな」

+ + +

「お待ちせしました！ ここよ！」

そう言っつてフレルの足がようやくやく止まったのは、街の中心からかなり離れた場所だった。

人通りがない訳ではないが、どちらかと言うとこの街の住人が多く暮らす場所のようで、周辺には畑のようなものや普通の民家が立ち並んでいる。

そこに ぼつん、と二階建ての建物があった。

「…居酒屋？」

その入り口に掲げている看板に気付き、リーフがその眉を不審そうに顰めると、まるでそう言っつのを予想したかのようにフレルが口

を開いた。

「どちらかと言うと食事処ね。でも一応二階で宿もやっているのよ？」

未成年お断りじゃないわ、とフレルは言い、リーフとアデイに笑いかける。

「さて、まず先に傷の手当てをしましょうか。こっちに来て、裏に水場があるの。…あ、宿代とかそういう交渉は中に店主がいるからそこでやって。わたしの名前を出せば通じるから！」

一方的に指示を出すと、リーフが反論する前にアデイを連れて行ってしまう。

リーフは一人取り残され、しばしどうしたものかと途方に暮れた。
(…あいつ、あんなに強引な性格だったか……?)

以前のフレルの事を思い返すが、昔馴染みとは言っても個人的に特別親しかった訳でもない。ただ数度 直接言葉を交わした事があるというだけで。

その時の事を思い返し、リーフの顔に苦虫を噛み潰したような表情が浮かぶ。

(出来れば、会いたくはなかったな)

おそらく、向こうもそう思っているに違いない。

それくらい、いい思い出だったとは思えない会話だった。むしろ互いに険悪だったとも言ってもいい。

…だから不審に思う。

アデイの怪我を見過ごせなかったのだとしても、何故自分を手助けするような事を彼女がするのか。

読めない。

彼女 フレルが何を思って関わってきたのか。なまじ好印象を互いに持っていた訳ではないだけに、その意図がわからなかった。

比翼の鳥(5)

「…いらつしゃい！」

扉の上の辺りに下げられていた木製のベルがカランカラン、と乾いた音を鳴らすと同時に、店内から明るい声が飛んできた。

その声と言えば、まだ若い。

店の佇まいが何処か落ち着いていた雰囲気を漂わせていただけに、少し意外に思いつつ声の方を見ると、奥のカウンターの向こうに人好きのする笑顔を湛えた男の姿を発見した。

見た所、三十歳前後と言った所か。

少し薄暗い店内の中、カウンターの周辺はランプで明るく照らされ、苦もなく男の容貌を見る事が出来た。

「お食事ですか？」

柔らかく響く声は耳当たりがいい。

明るい栗色の髪は少し長めで、深緑の瞳は思慮深く訪れた客リーフに向けられている。

「いや…」

答えつつカウンターへ向かうと、店主と思われる男はおや、と言うような顔になる。そして僅かに首を傾けながら、ひよっとして、と尋ねてきた。

「フレルに言われて来られましたか？」

「！」

まだ彼女の名を一言も出していないのに、この言葉。

リーフは面食らい、咄嗟に返事が出来なかった。そんな彼の反応が予想通りだったのか、やはり、と店主は笑う。

「…何故、わかつたんだ？」

感じた疑問を口にすると、店主は口元の笑みを深めて。

「簡単な事ですよ。ここが宿もやっている事は、地元の人間以外は誰も知らないからです」

くすくすと笑いながら、店主はどうぞ、とカウンター席に座るよ
うに勧めた。

断る理由もなくその椅子に腰掛けると、それを待っていたような
タイミングで再び口を開く。

「お客さんは僕の勘が正しければ、恐らく今日この街へやって来た
ばかりの旅人でしょう？」

「あ、ああ……」

またしても見透かしたような言葉に、リーフは再度ぎこちない返
事を返す。すると店主は不自然ではない笑顔で説明を続けた。

「フレル…ええと、あなたが会った女性は、この店に住み込みで働
いてくれている人なんですよ。彼女は不思議な人でね。困っている
人を見つける名人なんです」

「…？」

「あなたもこの街を多少散策したなら見たでしょう。どの宿もかな
り高めに宿代を設定している。特別、協定などで決まっている訳で
はないのですがね。この街がシャウルドとマザルークの国境に接す
る街になり、交通の要所になってしまったせいで人の行き来が一気
に増えた。特に冬間近になると、この街は国境を越えようとする人
でごった返します。すると…出てくる訳です、今までの宿と同様に
考えていて、この街で立ち往生する人が」

確かに、とリーフは心の中で頷く。

実際、これだけ探し回ったのに宿代は何処も似たり寄ったりで、
自分達も正に困り果てていた。

「…そんな人をね、彼女はここに連れてくるんです。しかも、ただ
困っているだけじゃなくて、うちにとって役立つ人ばかりをね」

「役立つ……？」

「ええ」

店主は頷き、しかしそれ以上は話す素振りはない。

今の言葉の真意が掴めず、知らず眉間に皺を寄せて考え込んだり
一フだったが、はた、とここへ入ったそもそもの用件を思い出し居

住まいを正した。

「…それで……結局、ここは宿なのか？」

「まあ、一応、と頭につきますが。亡くなった両親が宿を営んでいたので、部屋は整っているんですが……」

「…が？」

「実は…僕は、少し足が悪くてね。そこまで手が回らなくなったので、宿は辞めたんですよ」

ほんの少し躊躇した後に言われた言葉に、リーフは軽く目を見開く。

「…済まない」

何となく言いたくない事を言わせてしまったような罪悪感を感じて、謝罪を口にする店主が慌てたように首を振った。

「あ、き、気にしないで下さい！　そういうつもりで言ったんじゃない事ありませんから！　…この足の傷には、少し…思い出したくない事があつたものですから。それで、宿の事でしたね」

「ああ」

「まあ…そういう訳で、表立っては宿を開いてはいないんですが。でも、フレルが言うんですよ。『折角部屋があるのに、使わないなんて勿体無い！』ってね。僕は一応、反対したんですよ。ここは街道から外れているし、十分な世話も出来ないから食堂だけで十分だとね」

そう言つて困つたように彼が肩を竦めた時、横から声が飛んできた。

「でもわたしは負けなかった。『じゃあ、世話ならわたしがやるわ！　ついでに客引きもしてあげる！』って言つて、ゴードを説得したの」

くすくすと楽しげに笑いながら、店の裏に通じる木戸から姿を見せたフレルは、そのままカウンターの方へやって来ると、ごそごそとその横にある棚を探り始めた。

そうしながら言葉を続ける。

「だからここは、時々、宿にもなるって訳。わたしがお客さんを連れてきた時だけね」

「フレル…何を探しているんだい？」

「ん〜、薬箱。この辺りに仕舞っていたと思ったんだけど……」

「薬箱？ ならその右奥の方にあるよ」

「あ、本当だ」

店主　ゴードという名前らしい　の言葉通りの場所から少し古ぼけた薬箱を発見すると、フレルはそれを抱えた。

「ありがとう、ゴード。ちよっと持って行くわね」

「それはいいけど、誰か怪我でも？」

「あ、うん。この人の連れの女の子が……」

「…手当てなら、俺がやる」

何の為にそんなものを引つ張り出したのか理解したリーフは、気安い調子で続く二人の会話に何処となく気まずい思いをしながら口を挟む。

一度に二人の視線を向けられて、一瞬どんな顔をすればいいのかわからなくなったりリーフだったが、いつもの無表情のままもう一度繰り返した。

「アデイの手当てなら俺がする。…アデイは？」

「え、と…奥の部屋に居てもらってるわ。見た目はひどそうだったけど、深い傷はないみたい」

「そうか…礼を言う」

リーフの問いに答えつつも、フレルの顔には軽い困惑がある。

何故彼女がそんな顔をするのか理由がわからないまま、リーフは椅子から立ち上がった。わざわざ彼女の手を煩わづらわせる事もない。

正直に言えば　出来るだけ、アデイとは接触してもらいたくないのだ。

何しろ彼女はこちらの事情を何一つ知らない。下手な事を言われでは敵わない…ただでさえ、自分はまだ説明が得意ではないのだ。アデイが自分の過去に疑問を抱いたとして、それを簡単に晴らす

事が出来るか怪しい。

そんな彼の心情を知ってか知らずか、フレルはそのまま奥の部屋に向かおうとするリーフを邪魔するように立ち塞がった。

「…何だ？」

「あのね、人の好意は素直に受けた方がいいわよ？」

「…？」

言われた意味がよくわからず眉根を寄せると、フレルは微笑を浮かべて続けた。

「心配なのはわかるけど、薬だってタダじゃないでしょ？　せめてこの薬箱を受け取ってから手当てに行つて欲しいものだわ。せつかく出したんだし」

「…だが……」

フレルの言葉には説得力があつた。

実際、応急処置が出来る程度の薬は所持しているが、その量は決して十分ではない。しかも薬は大抵高価だ。

提供してもらえるのなら受ける方がいいのはわかっている。けれど、まだフレルの対する拘りが、リーフに薬箱を受け取るのを妨げていた。

そんな彼の逡巡を見透かしたように、フレルは意味ありげにリーフを見つめる。そしてふと、身を寄せてきた。

「安心なさい。あなたが心配するような事は、一つも話していないわ」

「…！」

至近距離で囁かれた言葉に、リーフは思わず目を見開いた。

「なんて顔してるのよ」

すぐさま身を離すと、フレルはケラケラと笑い出した。

「ほら、大丈夫だつてば。取って食いはしないから」

「…どういう意味だ」

「だから。その薬箱一つ貸すくらいで、宿代を跳ね上げたりしないつて事よ。ほら、アデイが待ってるわよ。行った行った！」

「……」

結局、薬箱を押し付けられる格好で、リーフはアディのいる部屋に向かう事になった。

調子が狂う。

以前、彼女と言葉を交わした時の事を思い出す。

彼女：フレルは、あんな風に明るく　遠慮のない笑い声をあ

げるような人物だっただろうか……？

否。

どちらかというと、いつも何処か思いつめたような、笑い方など知らないのではないかというような様子だったように思う。

笑い方を知らないという部分に関しては、『天使』全てに共通する事ではあったけれども。

比翼の鳥（6）

軽く扉を叩いて中に入ると、所在なさげに椅子に腰掛けていたアディは、驚いたようにその目を丸くした。

「え？ リーフ？ あれ…フレルさんは？」

「…そこまで手を煩わづわせる訳にはいかないだろう？ 代わってきた」
言いながらも薬箱を持ち上げて見せると、何故かアディはあからさまにほっとした顔を見せた。

「…どうした？」

「え？」

怪訝に思い尋ねると、自分が浮かべた表情など気付いていなかったのか、リーフの問いにきょとんとした顔になる。

「今、この薬箱を見て安心しただろう」

「え？ あ…うん、えっとね…フレルさんが『うちの消毒薬は効果はばっちりだけど、そこまで沁みないから』って言ったの。だから…つい」

へへっと、照れたように笑う顔に嘘はない。

そんな事かと呆れ半分にため息をつきつつ、床こゝろにかた跪く。明らかにアディの一挙手一投足に過敏になっている自分を、自覚しながら。

「ほら。傷を見せてみる」

「うん……」

それでもやはり消毒の痛みに恐怖を感じるのか、アディはおそろおそろ派手に擦り剥いた膝を見せた。

傷は先程のフレルの言葉を肯定するかのようになり、出血などがあった割りに深くはない。少々範囲が広いので、ひどく見えただけのようだ。

ほっとしつつ、薬箱を開け、そこに入っていたいくつかの壘を取り出してはそのラベルを確認する。

三つ目で目的とする消毒薬を見つけ、それを清潔な綿に含ませた。
「…いいか？」

念の為に確認を取ると、まだ始めてもいないのに来るべき痛みを想像してか、身を硬くしてアデイがぎこちなく頷く。

その顔を上目で見ながら、手早く傷口を消毒する。

その間、アデイは弱冠涙目になっていたものの、いつものような大騒ぎはせず、黙って耐えていた。

消毒を済ませると、化膿止めの薬を塗って治療は終わった。それを確認して、アデイはほつと肩から力を抜く。

「…沁みたか？」

「…うん」

薬を片付けながら尋ねると、アデイは頷く。その返事にリーフはそれはそうだろうな、と心の中で同意する。

何しろ、使った消毒薬は普段リーフ達が所持しているそれよりも高価な分、強力だがそれだけ沁みる代物だったのだ。

おそらくアデイを怖がらせない為の方便だったに違いないが、ここはあえて真実を黙っておく事にした。

「…ね、リーフ」

元通りに薬を仕舞った箱を抱え、再び立ち上がったリーフに、アデイは涙目のまま声をかける。

「何だ？」

「フレルさんも…旧アデイアの人なの？」

「…何故、そんな事を？」

フレルとの関係について、おそらく何か尋ねられるだろうとは思っていたが、もっと別の事を尋ねるとばかり思っていただけに、その問いかけに幾分拍子抜けする。

だが、アデイのその質問には、それなりの理由が存在していた。

「リーフの昔馴染みって言ったでしょ？ それって、あたしと会う前の事だよな？」

「…ああ、そうだな」

そつでなければ、アデイも彼女を知っていなければおかしい事になる。

実際、嘘でもないので頷くと、アデイはおずおずと尋ねた。

「じゃあ、どうして…フレルさんには、マザルーク訛りがあるの？」

「……！」

全く予想もしていなかった部分を突っ込まれ、リーフは思わず絶句する。

そんな彼に畳み掛けるように、アデイは更に疑問をぶつける。

「リーフはアディアの人なんだよね？ だから…何で知り合いののかなあつて……」

確かに、フレルには僅かにマザルーク訛りがあった。

現在、旧アディアは元々使用していた言語の他に、今この地を支配しているシャウルドの公用語が共に使われている。

フレルが使っていたのは、旧・アディアの言葉。それはおそらく、シャウルドの言葉に慣れ親しんだ人間だったならば、気付きもしないほどの訛り。

だが、旧アディアとマザルークは公用語が違っていただけに、微妙な節回しでも生粋のアディア人であるアデイの耳は、敏感に違いを捉えていたのだ。

…何故、フレルの言葉にマザルークの訛りがあるのか。その理由をリーフは知っている。

それは彼女が長い事、マザルークの領域を担当していたからだ。

だが、それを正直に言う訳にもゆかない。もし、フレルがその事を隠しているのであれば、なおさらだ。

それ以前にお互いが抱える秘密は、公になるべき事ではない。

(まずは、先にあいつと話し合う必要があるそうだな……)

そう結論したリーフは、彼の答えを待つアデイに目を向けると、出来る限り不自然に聞こえないように努力しながら口を開いた。

「…話すと、少し長い話になる。先に食事をしよう」

言われて空腹を思い出したのか、アデイの手が無意識に自分の腹

部に向かう。そう言えば、昼もろくに食べていなかった。

「後で話してくれるの？」

それでも気になったのか確認してくるアディへ、リーフは頷く。

そこでようやくほっとした笑顔になると、アディは座っていた椅子からえいやっと立ち上がった。

「じゃ、ごはんにしよう！」

笑顔で宣言した端から、くう、とアディの腹が鳴き、アディはこれ以上ない位に赤面した。

+ + +

本来は食事処と言うだけあって、ゴードの料理はかなりの出来映えだった。

最初に出されたきのこのクリームスープから大はしゃぎしたアディは、その後が続いた鳥の香草焼きや焼きたてのパンに至っては諸手を上げて拍手喝采する有様だ。

「美味しい〜〜〜！！ ゴードさん、これ、すっごく美味しいよっ！！」

頬を紅潮させた満開の笑みでの賞賛に、ゴードの顔も嬉しそうな笑顔になる。

「そうかい？ パンはまだあるからね、たくさん食べてよ」

「ホント！？ じゃあ、食べるー！！」

につこり笑って干切ったパンを頬張り、隣で呆れたように見つめるリーフの存在など気付いてもいないように、幸せそうにもぐもぐと口を動かす。

元々好き嫌いもほとんどなくよく食べる方だが、久しぶりのご馳走に箸たかが外れているらしい。

この小さな身体の何処に、これだけの食べ物が入るのだろうと感心するくらいに、アディの食べっぷりは見ていて気持ちの良い程だった。

「本当に美味しそうに食べるわねえ」

別の客のテーブルに料理を運んでいたフレルは、カウンターに戻つてくるとそのままアデイの隣の椅子に腰を下ろした。

「これだけ美味しそうに食べてもらえて、ゴードも嬉しいでしょ？」

「そうだね」

フレルの言葉に、ゴードは微笑んで答える。

「今まで、いろんな人が食べに来たけど、アデイ程のいい食べっぷりのお客さんはいなかった気もするよ。手放して『美味しい』って言われたのも久し振りかな」

「そうなの？ こんなに美味しいのに！！」

アデイからすれば、これだけ美味しいものを出してもらって、『美味しい』と言わないのは犯罪行為に等しい事だった。

野宿の多い旅をしていると、どうしても自分達で食事を作らざるを得ない。

材料だつてその場で仕入れるものになるし、調味料なんて高が知れている。出来た物が美味しく出来るかなど、神様でもないとわからない事だ。

料理を美味しく作る大変さを知っているから、美味しい時は『美味しい』と口にする。アデイにとって、それは当たり前のこと。

「…いつでもあると思うと、ありがたみが減るものだからね」

そんなアデイの考えを見透かしたように、フレルが苦笑混じりにそんな事を口にする。

「その代わり、美味しいと思ったらお客さんはまた来てくれるわ。」

アデイのように直接口にしなだけでよ」

「…そっかあ」

フレルの言葉に納得したのか、アデイは疎かそかになっていた手と口をまた動かし始める。

それを横目に、フレルはふと思いついたようにリーフに声をかけた。

「ねえ、リーフ」

「…？」

「ちよつと手伝ってくれない？ そつちはもう食べ終わっているみたいだし」

言いながらもこちらに向ける目には、明らかに別の意図がある事を示している。

それを敏感に感じ取って、リーフは口に使っていたワインのグラスをカウンターに置くのと立ち上がった。

「何をすれば？」

「こつちよ。ついて来て。いくつかワインの壇を運びたいの。男手があつたら一度に運べるでしょ？」

言いながら、フレルは店の裏へと続く木戸に向かう。

ちらりと視線を向けると、アディはもぐもぐと食べながら、行つてらっしゃいとばかりに、ひらひらと手を振っている。

保護者意識が働いて、思わずほどほどにしておけと言いかけたが、寸での所で押し留める。

今はアディの事よりも、フレルと話し合う事の方が大事だ。

リーフは小さくため息をつき、フレルの後に続いた。

比翼の鳥（7）

「その棚の上に木箱があるでしょ？ ……そう、それ。そこに五本くらい入っているはずなんだけど」

連れて行かれた先は半地下になっている食糧庫だった。

ランプの明かりだけでは心許ない暗がり広がる中、指示された棚の前に立つと、横にフレルが当たり前のように並ぶ。

「この頃、ワインの消費が激しいの。まあ、それだけ住民にゆとりが出来たって事だし、平和で結構なんだけどね」

「……………」

言わんとする事はわからないでもない。

戦火の絶えない明日をも知れない時期では、蒸留酒など日持ちがして少量で酔えるものが売れる。気付けにもなるし、消毒薬の代理にもなるからだ。

嗜好品が売れるという事は、それを楽しめる状況にあるということ。

言われるままに、棚から木箱を下ろす。

乗せるのはともかく、下ろすとなると女の細腕では確かに辛いかもしれない。そんな事を考えながらも、リーフはその目を自らも「そこそと周辺を探っていたフレルに向けた。

「…おい、フレル」

「何？もしかしてそこになさそう？」

返って来た呑気な声に、リーフは僅かに苛立ちを感じた。

まるで本当に手伝わせる為だけに、ここに連れ出したようだ。だが…先程の意味ありげな目。そして、以前の彼女を思い返すに、そんな事だけの為に動くとも思えず、リーフはずばりと核心に触れる事にした。

「…いつ、力を手放した？ 『フリーユリー』」

「……………」

フレル　かつては、フリーユリーと呼ばれていた彼女は、ごそごそと探っていた手の動きを止めると、姿勢を正して真っ直ぐに彼を見つめてきた。

そこには先程までの友好的な表情はない。かつて、彼を見た鋭さすらも感じる冷たい目。

そして彼女は静かに口を開いた。

「…その言葉、そっくり貴方にお返しするわ、リフエイ。上位天使の中でも、否定派の最たる場所にいた貴方が、一体どういう心境の変化？」

静かな声には、僅かな敵意がこもる。

「　聞いているのは、こちらだ」

「相変わらずね。…こちらの意見には耳を貸す気もないの？」

冷笑を浮かべ、軽く肩を竦めるのは、かつて対峙した天使『フリーユリー』そのままだった。

何故かその態度にほっとする自分を自覚しながら、リーフは告げる。

「お前がどんな経緯で、今そうしているのか…実の所、それはどうだっていい。ただ…、アデイには余計な事は話さないで欲しいだけだ」

「…余計なこと？　たとえば、元『守護天使』だったとか？」

「　そうだ」

その答えに対するフレルの反応と云えば、彼の予測をまったく超えたものだった。

しばらく沈黙したかと思うと、いきなりぷつと吹き出したのだ。

何事かと眉根を寄せる彼の前で、彼女は盛大に笑い声を上げた。

「あ…っ、あはははははは！」

「！？」

ぎょつと目を見開き、珍しく動揺を見せた彼に、フレルは肩を揺らして笑いながら、心底愉快そうに言い放った。

「あ、あの、あのリフエイが……！　あんな子に知られたく…ない

つて!?! うつそみたい……!! あは、ははははは……っ!」

その遠慮のない言い草に、流石にかつと頭に血が昇る。反射的に怒鳴り返そうとした矢先、不意に笑いを収めたフレルは真顔で言い切った。

「そんな事、言う訳ないでしょ。頼まれたって口にはしないわ」

「……っ」

「あのね、貴方にも事情があるように……わたしにもそれなりの事情があるの。……知られる訳には行かないのよ。わたしが、彼の守護天使だったって事は」

その顔は真剣そのもので、リーフは言い返す言葉を失った。

そんな彼をちらりと流し見て、フレルは再びごそごそと周辺を探り出す。

「……フリュー……」

「フレル。……その名で呼ぶのなら、わたしも貴方の事を『リフェイ』って呼ぶわよ」

ドスの効いた声で言われ、言葉を飲み込んだ。

そして彼もまた、先程下ろした木箱の中を探り、四本のワインボトルを引っ張り出す。……そろそろ戻らなければ、アディ達も何をやっているのかと思うに違いない。

フレルもまた、そこからいくつかの瓶詰めを引っ張り出す。それを抱えながら、釈然としない顔のリーフに、フレルは再び最初の友好的な笑顔を見せた。

「……あのアディって子、いい子ね」

「……そうか?」

「ええ。あんなにも人間を毛嫌いしていた貴方が、趣旨替えするだけの子だと思っただわよ?」

くすくすと軽やかに笑い、リーフが何か言う前にさっさと上へ続く階段に彼女は向かっている。

そして途中で振り返ると、何とも言えない顔をしているリーフに

静かに告げた。

「もしかして、貴方は知らないんじゃないの？」

「…何をだ」

フレルの言わんとする所がわからずに問い返すと、フレルはその顔に哀しげな微笑を浮かべた。

「先程の言い草だと、知らないんでしょうね。…リーフ、『天使』がその役目を放棄するのは、一種の罪悪だという事はわかってるわよね？」

「…ああ」

彼とて『守護天使』だった身の上だ。

だが、元々人間に対して否定的だった上に、特殊な立場にある『上位天使』の一人だった彼は、それを『恥ずべき事』としては捕らえていても、実際の所どれほどに天使にとって罪深いものかまでは理解していなかった。

…それを証明するかのようには、フレルは彼の知らない事を口にする。

「わたし達が『守護天使』だって事は、誰にも知られては駄目よ。話すとか話さないとか、そういう次元の問題じゃないの。わ

たし達は罪人。天の掟に背けば、当然ながら罰を受ける。守護する人間の運命を変えた時は、天使としての『力』と『格』を。守護の対象となっていた人間に、その守護をしていた事を知られた時は

…」

フレルはそこで一度言葉を切った。

そして怪訝そうに上へと目を向ける。同時にリーフも弾かれたようにそちらに目を向けていた。

「…何か……」

いる、というフレルの言葉は言葉にはならなかった。

… ガシャン…ッ！

パリーン…！！

比較的近くで、硝子が盛大に割れる音が響いた。同時に、微かに聞こえてきたのは 悲鳴。

「ッ、どけ!!」

「きゃあッ!? ち、ちよつと…リーフ!? 待って、わたしも…」

進路を塞いでいたフレルの身体を乱暴に押しつけ、リーフの身体は動いていた。背後から追いつがるように聞こえたフレルの声は、もう届いていない。

彼の意識は、先程聞こえた悲鳴だけに囚われていた。無意識に腰に手をやり、軽く舌打ちをする。

剣が、ない。

宿に泊まる手続きをする際、上の部屋へ荷物と共に置いてきたのだ。

(…、だが今は取りに行つてる場合じゃない…!!)

先程の悲鳴 あれは確かにアディのもの。

ここしばらく忘れていた緊張感を取り戻す。彼の目に、先程フレルに対して見せていた凍えた光が再び宿る。

目的の為ならば手段を選ばない 冷徹な。けれども、同時に

それは焼け付くような焦りもあつて。

(無事でいてくれ…!!)

祈るようなこの気持ち、何処から生まれてくるのかなど、彼にもわからない。

けれどもその衝動に身を任せるのは、自然な事だと思えた。

ごく、当たり前前的事だとそう思った。

今はまだ、その感情が何かわからないけれど。

そしてリーフはその感情のままに、やがて辿り着いた表へと続く木戸に手をかけた。

比翼の鳥(8)

フレルがリーフを伴って木戸の向こうに消えるのを見送ると、コトンと音がして目の前に皿が置かれていた。

注文した料理はもう終わっていたはずで、何だろうとそこに目を向けると、そこには今までほとんど口にした事のないような、綺麗なお菓子が置かれていた。

ランプの光を受けてきらりと光るそれは、果物のタルトだった。

中に詰められた赤い果実が宝石みたいにつやつやで、タルト生地は見るからに食欲を誘うキツネ色。しばらくアディは、言葉もなくそれを見入っていた。

「う…っわあ…、綺麗…！」

正直な賞賛に、それを置いたゴードの顔はにっこりと満足そうな笑顔を浮かべる。ここまで素直に感想をくれると、作り手としてあれこれしたくなってしまふ。

「こ、これ…？」

「まあ…お近づきの印、かな」

「…食べていいの…？」

おそろおそろ尋ねるその姿に、ゴードは思わず吹き出す。

目の前に置くだけ置いて、食べては駄目なんてそんな意地悪はとも出来ない。もちろん、アディがそう考えている訳でない事もわかってる。

どちらかと言うと注文もしていないものを食べていいのだろうか、という困惑からそんな事を尋ねたのだろう。

「どうぞ。食べてもらう為に作ったものなんだからね。…お代の事は心配しなくてもいいよ。これは宿代とは関係ないから。君の連れ…リーフだっけ。彼に何か言われたら、僕がちゃんと説明してあげるよ。」

そう言うと、ようやく安心したのかアディの顔に笑顔が戻った。

「えへへ、良かったあ。リーフって、こっぴうのにちょっとうるさいんだもん」

「彼…お兄さん、じゃないんだよね？」

「え、うん。血は繋がってないよ」

言いながら、アデイは添えられていたフォークを手にする。

心はずでにタルトにあるのか、ゴードの質問に対する答えもあっさりとしたものだった。

「あたしが四歳くらいの時に会ったの。それ以来、ずっと一緒に旅をしてるんだ…」

ゴードさん…これ、綺麗過ぎて崩すのが勿体無いよ〜」

いざフォークを握ったはいいが、綺麗に仕上げられたタルトを崩せずに、アデイが困った顔でそんな泣き言を言う。

そんなアデイにまた吹き出して、先程フレルと連れ立って出て行った青年を思い出す。

(なるほどね、道理で似ていないと思った)

兄妹にしてはあまりにも共通点がないと思っていたら、赤の他人だったのかと納得する。

だが、先程リーフがアデイに向けていた心配そうな目は、本心からのものようだった。血の繋がりなどなくても、絆というものは出来るものだと暖かな気持ちでそんな事を考えた時だ。

…ざわ…っ

「…?」

何か、人の気配を感じた気がして、ゴードは何気なく店の入り口へと顔を向けた。

先程他の客は帰って行き、今、店の中にはアデイとゴードしかない。新たな客だろうか、そんな風に思った矢先。

…バンツ！！

乱暴に店の入り口の扉が開き、あ、と思った時には黒ずくめの男達が数人、風のような勢いで入ってきていた。

…客ではない。

そんな認識を持った時には、もう男達は状況についていけない二人に肉薄している。

…ガシャンツ！！ パリーン！！

反射的に身を引いた瞬間、腕が背後にあった壇に当たって床に落ちた。

数本まとめて落ちたそれは、思いのほか激しい音を立てたが、侵入者を怯ませる事はなかった。

「…え、や、きゃあああ！？」

気がついた時には、男達の一人がアデイの腕を掴んで捻り上げていた。

「い…ッ、た…」

「…アデイ！？」

「…動くな」

自由を奪われ、苦痛に顔を歪めるアデイの様子に身を乗り出すと同時に、ぴたりと冷たく硬い感触と感情のこもらない声突きつけられる。

男の一人がゴードの咽喉元にナイフを向け、それ以上の行動を制限する。…強盗にしては変だ、と思った矢先、アデイを捕えていた男が別の男に声をかけた。

「…おい、確認しろ」

「はっ…間違いありません。先日受けた報告にあった容姿と酷似しておりますし、何よりこの特徴的な瞳の色…別人である可能性は低いかと」

(…何だ……?)

そのやり取りを聞く限りだと、どうやら目的はアディの身柄らしい。

だが、アディ本人にはその理由がわからないらしく、自分を見下ろす二つの視線の狭間で混乱を隠さない顔をしていた。

捻り上げられていた腕は、どうやら逃げる素振りがない事で、多少は力を緩めてくれたらしいが、完全に解放はしていない。

一体、どうなっているのかと思っていると、アディを捕えている男と、ゴードの行動を制限している男以外が、いきなりすつと跪ひざまずいた。

それはなかなか堂に入っていて、彼等がそうした礼を取る事を日常行っている事を示していた。すなわち 明らかに、賊とは違ちがう。

そしてアディの容姿を確認した男が静かに口を開いた。

「…突然、このような無礼を働いて申し訳ございません」

淀みなく発音されたのは、マザルークの言葉。

この街では決して珍しくはないものの、その後が続いた言葉はゴードを驚愕させるに十分だった。

「旧アディア王家の直系にして、現在、唯一王位継承権を有するアディライト・ケイナ・アディア様。我等が主がその身柄を欲しておられます。…ご足労願えますか？」

比翼の鳥（9）

『旧アディア王家の直系にして、現在、唯一王位継承権を有するアディアライト』ケイナ』アディア様。我等が主がその身柄を欲しておられます。…ご足労願えますか？』

正に木戸を開こうとした瞬間に聞こえた声に、リーフはぴたりと動作を止めていた。

…動けなく、なった。

（…追手が…？）

しばらく姿を見ないと思っていたが、よもやこんな場所で狙うとは。

ぎり、と歯噛みする。

ずっと隠し続けていた事　それが、知られた。

木戸越しに聞こえてくる声は微かで、その言葉に対してアディアがどう反応したのかはわからない。

だがおそらく、ひどく困惑しているに違いない。アディアは今まで、自分の身が狙われていた事すら知らないのだから。

「…ねえ、どうしたの？」

木戸の前で立ち尽くすリーフに、ようやく追いついたフレルが背後から声をかける。

先程の言葉は聞こえなかったのだろう、その顔は疑問符が浮かんでいたが、状況を鑑^{かん}みてかその声は囁くようなものだった。

「一体、中で何が…」

「…説明は後だ、一度ここを離れた方がいい」

口早に言いながら、早くもリーフの足は木戸から離れ、二階に上がる階段に向いている。

「ちよっと？　リー…」

「頼む、緊急事態だ。」

協力してくれ」

「……」

その言葉に、フレルは驚きを隠さずに目を見開く。

おそらく、彼の口から『頼む』などという言葉聞いたからに違いない。

だが、フレルはすぐに表情を改めると、木戸の方へ一度不安げな顔を向けた後、すぐにリーフの後に続いて階段を昇った。

建物自体は古いものの造りがしっかりとしているからだろう、幸いにも階段は軋み音一つ立てなかった。

リーフが向かったのは、彼等に与えられた部屋。そこに入り、荷物の中から剣を取る。

「…説明してくれる？」

リーフの只ならぬ様子に、フレルも硬い表情で説明を求めた。

アデイが追手の手にある今、形振りを構っていられないのは確かだ。そして、アデイ自身が自身の秘密を知った今、隠していても良い事は一つもない。

リーフは腹を括るとフレルに簡単に事情を説明した。

「アデイは…この旧アディアの王家、唯一の生き残りなんだ」

「…アデイが？ まさか……」

思わずといった調子で呟き　しかしすぐにフレルは納得したような顔になる。

「　そういう事なの。どうしてアデイみたいな子に、上位天使だったあなたが守護についたのか疑問に思っていたのよ。まさか、あの子が滅んだ国の王族だなんてね。という事は…もしかして誰かに狙われているの？」

「ああ…、何処の手の者かわからないが、今までも何度か刺客は送られてきていた。下にいる奴等は、マザルークの言葉を話していたようだがな……」

苦い口調で呟くリーフを横目に、フレルはしばらく手を口元に当てながら考え込んだ。

「…マザルーク、ね……」

「何か心当たりでもあるか？」

「いいえ……でも、そうね。アデイが上位天使の守護を得る身だったのなら、考えられる可能性があるわ」

「……何だ」

今は得られるのならどんな情報でも欲しい。

そんな気持ちで言葉を促すと、フレルはまじまじとリーフを見つめ、小さく嘆息した。

「……その様子だと、本当に何も知らないのね」

「何の事だ」

その言い方に僅かな棘を感じて睨みつけると、フレルはフレルで睨み返してくる。

「流石は人の命運を見定める上級天使さまって事よ。あなた、アデイの運命を変えるまで、自分が天使でなくなる事なんて有り得ないと思っていたでしょう」

「……」

それは正に凶星で、リーフは反論の言葉もなく黙り込む。

そんな彼を呆れたように見ながら、フレルは彼の知らない事を話し始めた。

「さつき、途中まで言いかけた事にも関係あるけれど……人の運命を変えるという事はね、決まっていた自然の摂理を曲げる事よ。これはわかるわよね？」

「……ああ」

「本来の流れを変えるには、相応の力を必要とするわ。その代償となるのが、天使の力や格だけれど……場合によってはそれだけじゃ足りない事があるのよ」

「足りない……？」

「そうよ。そんな事は滅多にない事だけどね……。その場合、代償なしに無理に運命を捻じ曲げる事になるから、その分のしわ寄せが何処かに出てしまうのよ。たとえば……その身近な人間なんかね」

たとえば、本来ならば生き延びるはずの人間が命を落としていたり、本来ならば死ぬはずだった人間が生き延びたり……。

つまり、アデイの運命がリーフによって変えられた時、他の誰かの運命にも影響を与えたかもしれない、という事だ。しかも一国の動向を左右するほどの。

「…あなたが守護になつたくらいだもの。アデイには二つの運命があつたんでしょう？ それも、命に関わるほどの事が。なら、周辺に与えた影響も相応のものになつてはいるはずよ」

フレルの言葉が何処まで信憑性のあるものか、彼にはわからない。だが、今の時点で彼女が嘘をつく必要もなく、リーフはその言葉を受け止めた。

…確かに、アデイには二つの未来が用意されていた。
一つは、アディアが滅んだ日に幼い命を落とす未来。

そしてもう一つは、かろうじて生き延びるが全身に火傷を負い、その立場を利用され、誰の事も信じられないまま、孤独と絶望の中で生涯を閉じる未来。

そのどちらを選んでも、アデイにとっては決して良い結末ではなかった。

二つの運命を持つ者は、大抵の場合どう転んでも不幸になる場合が多い。アデイも例に漏れずそうだった訳だが、その運命はリーフによって変えられた。

死ぬはずだったアデイが今生きている事、それが果たして他にどのような影響をもたらしたのか、天使の力を失った彼等にはわからない。

「アディアが滅んで、十年近くになるわ。本人にもその頃の記憶がないみたいだし、はっきり言わせて貰えば利用価値があるとは思えない。にも関わらず狙われるのは」

「…アデイに流れる『血』を必要とする、何かがあるという事が」
もうとつくに終わったはずの争いは、人々の知らない水面下でもまだ続いているというのか。

「まあ、予測に過ぎないけれどね。でもそれなら、アディの命の危険だけはないわ」

励ますようなフレルの言葉に、リーフは頷く。
状況は良いとは言えないが、相手がアディの命ではなく、身柄を求めのなら最悪の事態だけは避けられる。それは確かに救いだっ
た。

しかし、同時に一つの問題が浮上する。

「だが…そうになると、ゴードの命が危険という事になる」
「……」

リーフの言葉に、フレルの表情が硬く強張る。

今、階下にいるのはアディだけではなく、ゴードもだ。おそらく、彼はアディが旧アディアの王女だという事を知ったに違いない。

人目を避けてアディを捕えようとするくらいだ、秘密を知ったゴードをそのまま放置して去ると思えなかった。

「…行つて来る」
「え…？」

剣を片手に再び入り口へと向かうリーフを、フレルは訳がわからないといった顔で見つめた。その顔を流し見てリーフは告げる。

「アディを取り戻してくる」

「！？」

まるですぐそこにある荷物でも取りに行くような口調に、フレルはぎよつと目を見開いた。

「な、何を言ってるの？ 取り戻すつて、一体どうやって…！ 相手が何人いるのかもわからないのよ！？」

「何人いるかはわかる。入り口付近に二人、アディを拘束しているのが一人、ゴードを拘束しているのが一人、それともう一人…マザールークの言葉を話す人間…全部で五人だな」

「…何でそんな事……」

木戸を開けてもいなかっただのに、人数を推測してみせるリーフにフレルは感心を通り越して呆気に取られた。

リーフは扉越しに感じ取った気配で人数を把握したのだが、それが普通の人間では到底出来ない事である事までには考えが回っていない。

信じられないと言わんばかりのフレルを怪訝そうに見ると、ついどのように付け加えた。

「余裕があつたら、ゴードも助ける。…それで貸し借りはなしだ」
言い捨てて、そのまま扉の向こうへ姿を消すリーフを思わず見送りかけ、フレルははっと我に返る。

そして慌ててその後続いた。

「…待つて、わたしも行くわ！ 手伝わせて！..」

比翼の鳥（10）

後ろ手で捻り挙げられた手首が、痛い。

掴む手は恐ろしく力が強くて、手を取り戻そうと動かそうと試みるが、びくともしない。

「…離して……」

せめてと思い訴えてみるが、その声は自分でも驚く位にか細いものだった。

どうしてだろう　いつから自分はこんな気弱な声を出すようになった？　…そうだ、さっき変な事を言われたからだ。

変な　突拍子もないこと。この自分が、旧アディアのお姫様だとかいう、出来の悪い冗談。

それと…多分、今、側にリーフがないから。だから余計に不安に感じているのだ。

そんな事を考えていると、目の前にうすね跪く男が口を開く。

「申し訳ありません、アディライト様。無礼なのは承知しておりますが、確実に身柄を確保するまでは油断が出来ませんので。不自由でしょうが、そのまま置いて頂きます」

耳に馴染まないマザルークの言葉。旧アディアが二つの大国の緩衝地帯であるだけに耳にする事も多く、男が言っている事はわかるが、いつそわからなかつた方が良かったとアディは思う。

口調は柔らかかったが、その言葉は聞いていて居心地が悪い。何しろ、その目はあからさまに狙っていた獲物を捕らえた優越感が漂っているのだから。

まるで、モノに対するような視線。そんなものを向けられて、いい気分がするはずもない。

その上、この男はまた自分を違う名で呼んだ。

アディライト様。

そんな名前、知らない。

自分は『アディ』だ。旧アディア王家の直系？ 王位継承権？
…訳がわからない。この人達は一体何を言っているのだろう。

最初の混乱が落ち着き始めると、もたげてきたのは理不尽な行為
に対する怒りだった。生気の戻ったオレンジ色の瞳に怒りを宿し、
目の前の男を睨みつける。

「…人違いだよ、おじさん」

「人違い？」

「そうだよ！ あたしはアディだ。アディライトなんて名前じゃない…！！ さつさとこの手を離してよ！！ 痛いんだから…っ！！」
一気にまくし立てると、男はまるで汚らわしいようなものを見る
ような目になった。そして小さく嘆息すると、その肩をわざとらし
く竦めて見せる。

「やれやれ……。口汚くていらっしやる。十年も下々の者と同じ生
活をしていたせいか、品性の欠片もない。これが王女だと知れば、
さぞかし旧アディアの民は嘆く事でしょうな」

「……っ」

面と向かって貶けなされ、アディは咄嗟に反論が出来なかった。

自分は王女様なんて身分ではない。そのはずだ 自信はない
けど、多分。

男は自分が『旧アディア王家の生き残り』だと思っているから、
そんな事を言っているに違いないのだ。

だからその言葉に傷付く必要はない。…ない、けれど。

でも 嘲笑わらわれて、平気でいられる程大人でもない。

アディはきゅっと唇を噛み締めて、更に言い返そうとする衝動に
耐えた。そんな事しても事態が変わらない事はアディにもわかる。

否、もつと悪くなる事も。だから、口惜しくても…我慢する。

そこにアディを捕えている背後の男が言葉を挟んだ。

「…確認が済んだのなら余計な口は開くな」

「はっ、申し訳ございません」

どうやらこちらが上官に当たるとしく、その一言で目の前の男はすぐさま表情を引き締める。

後ろ手を取られているせいで背後の男の表情は見えないが、冷やかな口調は聞いているアデイも気が引き締まるような気分になった。

(…怖い……)

これから自分はどうなってしまうのだろうか。

腕の痛みには歯を噛み締めながら、顔をゴードの方に向ける。横から剣を突きつけられた姿に胸が痛んだ。

信じがたい事だし、今でも何かの勘違いだと思いが、彼等の目的が自分なのだとしたら、ゴードがこのような扱いを受けるのも自分のせいだ。

(あたしが…いたから……)

そして同時に疑問が浮かんだ。

どうして今なのだろう、と。

アディアが滅んで十年近く。何故、今になって旧アディアの王女などを捜す必要があるのだろうか？

それとも　この十年、ずっと捜し続けていたとでも言うのだろうか？　だとしたら随分と手際の悪い事だ。

(…それとも……)

もう一つの可能性に思い当たり、アデイは唇を噛み締める。

(　今までもずっとこの人達に追いかけていたけど、うまく逃げ続けられていたということ……?)

しかも、当事者である自分は何も知らないまま。

咽喉の奥に鉛が詰まったような息苦しさを感じた。腕を捻り上げられている痛みも気にならなくなる程に、それは苦く重い。

そう考えると思い当たる節がいくつもある。

眠る前にはなかった傷が、翌朝リーフの腕にあった事があった。

久し振りに宿に泊まった夜、夜中にふと目を覚ましたらリーフの

姿が消えていた事も。

市場で必要なものを買う時に、手分けした方が早いし、一人でも大丈夫だと言っても頷いてくれなかった。

その度にリーフはあの無表情で、枝で切っただけの、寝付けなかったあの、お前一人ではぼったくられるのがオチだ、だのと言いついたが、もしそれが 追手から逃れる為の、あるいは自分の身を守る為だったら？

(違う…違うよね、リーフ…あたし、王女様なんかじゃないよね…！?)

そろそろ、フレルと共にワインを取りにいったリーフが戻って来ても良い頃だ。

戻ってきた彼が今の自分の状況を見た時、彼はどう思うだろう。どう行動するだろう。言いがかりだと言うだろうか。それとも。

そんな事を思った時だった。背後の男がまるでアデイの心を読んだかのように、口を開いた。

「王女に付き従っていたあの男はどうした」

「共にこの店に入った事は確認しておりますが…そう言えば姿が見えませんか。お陰で余計な妨害に遭わずに済みましたが」

取りようによっては呑気な言葉のせいか、男の語調が強まる。

「すぐに捜して身柄を拘束しろ。抵抗する場合は殺害しても構わないという指示も頂いている。一人だからと油断は許されん。」

自分の頭上で交わされた会話に、アデイは見えない拳で殴られるような衝撃を感じた。

(…リーフが、危ない)

男達がリーフの存在を知っているだけでなく、危険視している事実がアデイの仮定を裏付けているようなものだったが、そんな事にはもう意識は向かっていなかった。

頭の中を支配したのは、会話の中のたった一つの言葉。

殺害

(リーフが、殺されちゃう……!!)

そんな事、許せるはずがない。

確かにリーフは何を考えているかわからない所があるし、情緒と
いうものが欠けているし、口を開いたかと思うと毒舌で、たまにと
んでもなく意地悪だったりするけれど。

それでも、アデイにとってはこの世界でたった一人の、心を許せ
る人間なのだ。

思いつくのは、いつか願いをかけた常緑樹。

焼け野原で出会って今まで、ずっと二人で旅をして来た。これか
らもずっと、そうして行けたらと望んでいた。心の奥で、そんな事
は子供の我がままだとわかっていながら。

かけがえのない人。

自分のせいで彼を失う訳には行かないと思った瞬間、アデイは叫
んでいた。

比翼の鳥（11）

「リーフは関係ないでしょ!？」

おとなしくなったと思つたアデイの突然の大声に、目の前の男が驚いたように目を丸くする。その顔を睨みつけて、アデイはさらに続けた。

「あんた達が用があるのは、あたしだけなんですよ!？ だったら早く連れて行けばいいじゃないか！ ゴードさんも自由にしてよ！

関係ないじゃない!！」

それは自分自身に対する扱いの理不尽さも含んで、たちまち燃え上がる。

怒り それもあつただろう。だがそれだけではない。

むしろ投げやりになつたと表現した方が正しいような、一方的な啖呵たんかだつた。

実際、アデイはこの時、自分の事など頭になかつた。腹立たしいとは思つたが、下手に逆らうと殺されるかもしれない、という恐れは欠片もない。

ただ、リーフやゴード、そしてフレルが自分のせいでひどい目に遭う事が許せないと思つばかりだつた。

だが。

「生憎あいにくですが、王女。それは聞き届ける事は出来ませんね」

相変わらずの侮蔑ぶへつを含んだ視線のまま、口調だけは丁寧ていねいに男はその訴えを退けた。

「どうして……っ」

「どうして? ……愚問ぐもんですな」

やれやれと言わんばかりにため息をつき、男はちらりとアデイを拘束こうそうしている男に視線を向ける。

そうする事で質問に答えるべきか上官に伺いでも立てたのか、アデイの問いかけに答えたのは背後の男だつた。

「対象の身柄を確保した後は、関係者は全て口を封じよとの命令を受けている。…諦める事だ」

「…そんな…!!」

そんなひどい、と彼等を詰なろうとした時。まるで狙ったかのように裏へと続く木戸が開いた。

そこにいたのは。

「駄目、フレルさん!!」

「フレル、逃げろ!!」

姿を確認したと同時に、アデイとゴードが叫ぶ。

木戸の向こうから姿を見せたのは、数本のワインボトルを手にしたフレルだった。

その場の全ての人間の視線が彼女に向かう。

二人の言葉を受けて驚いたのか、フレルはその場でワインボトルを全て床にぶちまけてしまった。

ガシャン、ガシャンとガラスが割れる音が重なって響く。たちまちその場はワインの濃厚な葡萄と酒精の香りに包まれた。

「…捕えよ!」

すぐさまアデイの背後にいる男が命令を下し、ゴードの身柄を拘束している男を覗いた三人がフレルの身柄を拘束すべく木戸の方へと向かう。

「フレルさん!!」

フレルは弾かれたように身を翻し、木戸の向こうへと姿を消す。

その後に男達が割れたワインのガラスを踏み越えて続くのを、アデイは絶望的な気持ちで見つめた。

その先は裏口に続いているが、男三人に追われて果たして逃げ切れるものか、アデイには自信がなかった。

それでも祈った。フレルが無事に逃げてくれる事を、ただひたすらに。

フレルは宿も見つからず、怪我までして困っていた自分達を親切にも助けてくれた人だ。これ以上、自分のためにひどい目に遭う人

が増えて欲しくなかった。

そして　　しばらくしてからふと疑問に思った。

そう言えばリーフの姿が見えなかったが、彼は一体どうしたのだらう。

その疑問が解けるのは、それから半刻ばかりが過ぎる頃だった。

+ + +

どうか無事に逃げてくれますように。

そんなアデイの心からの祈りが届いたのか、フレルが身を翻して去ってから半刻が過ぎようという頃になっても、追いかけていった男達は戻らず、フレルもまた姿を見せる事はなかった。

フレルを捕える事に手間取っているのか、それとも別に理由があるのか　　前者である事をアデイは切に願うばかりだ。

ゴードを捕えている男が、先程から居心地悪そうにしきりとこちらへ視線を向けている。上官に当たると思われる男の様子を窺うかがっているのだらう。

顔こそ見る事は出来ないが、背後の気配が苛々としたものになっていくのを感じ、アデイもまた内心首を傾げていた。

確かにフレルが無事に逃げてくれていても、いなくても、いくらなんでも追手が戻ってきて良い頃合だ。

取り逃がした事に責任を感じて、彼等が戻って来れないという可能性もあるが。

「…遅い」

やがて背後から、耐え切れなくなったかのように、苛立ちをあらわにした声が聞こえた。

「遅過ぎる。女一人を相手に何をやっておるのだ……！」

押し殺してもなお、怒りに満ちたその言葉に、ゴードを捕えている男が身を竦ませる。やがて彼は重苦しい沈黙に耐えかねた様子で、

恐る恐る口を開いた。

「あの…隊長。私も様子を見に行きましようか」

「…何だと？」

「彼等が戻らなければ、我々も退くに退けません。彼等も選りすぐりの精鋭、そう簡単にどここうなるとは思いませんが…報告にあつた王女に従っていた男の姿も未確認ですし、あるいは……」

口ではいろいろ理屈を述べているが、本音はどうもこの気まずい場所から逃れたいだけのようだ。

それを見透かしたのか、返った言葉は取り付く島もない程に冷たいものだった。

「ならば余計に行く必要はなかるう。第一、その男はどうする気だ」

「そ、それは……！ その、この男は足が不自由なようですし、一人で逃げ出す事も出来ないと……」

「推測だけで物を言うな。ここを手薄にする訳には行かん。」

あと半刻待つ。それで戻らない時は

ガシャアアアン！！

切り捨てる、と男が続けると時を同じくして、先程フレルが姿を消した裏へと続く扉の方から、激しい物音が鳴り響いた。

「!?？」

「な、何事だ……!?？」

今度はワイン壘が数本割れたのとは比にもならない大音量だった。流石の彼等もつろたえる。これだけ大きな音では、周囲の人々が何事かとここへ来るかもしれない。

目撃者は最小限に、見られた時は可能な限り口を封じよ。

そう、彼等は命じられていた。それだけ秘密裏に事を運ばねばならなかった。

それ相応の訓練を積んだ彼等には、確かに一般人が束になって来られても捌けるだけの能力があつたが、だからと言って事を大きく

するのは望む所ではない。むしろ避けたい所だ。

焦りは隙を生む。

思いがけない音に対して、その場にいた全ての人間の意識がそちらに向き、それ以外の事に疎かおろそかになったその、瞬間。

アデイは何故か、リーフの事を思い出した。

まだ、一度も彼の姿を見ていない。彼は、一体何処にいるのだろうか？ 無事でいるのだろうか？

今の音は、先程の追手と彼が争った際に起きたものでなければいけれど。

そんな事を思った、刹那。

一瞬の隙を突いて、彼等の死角となっていた正面の入り口が勢い良く開いた。

カランカランカラン、とドアベルが高らかに音を鳴らし、はっと彼等を我に返らせた時には、そこから飛び込んできた一人の人間

リーフが、アデイを後ろ手に捕えている男の背後に迫っていた。

比翼の鳥（12）

…ザンッ！！

それは、正に一閃。

抜き放っていたリーフの剣が、男の背を切りつけた。

「ぐわっ！！！」

「隊長！！！」

不意打ち同然の攻撃に、思わずアデイの腕を掴んでいた男の手の力が緩む。

元からそれが目的だったのか、切りつけたとは言っても浅い。厚い服地を切り裂き、皮一枚切れる程度だ。

だが、それで十分だった。

アデイはその隙を逃さず、身を捻って腕を取り戻し、ついでお返しとばかりにその向こう脛を蹴り飛ばしてその場から離れる。

思わず呻いてしゃがみこむ男をその場に残し、アデイは無我夢中で剣を片手にそこに立つリーフの元へと駆け寄った。

「…、リーフ……ッ！！！」

そのまま、その身体にしがみ付く。

今まで剣を持つてはいても、リーフがまともにそれ使った所を見た事がなかった。

護身用とは言いながらも、リーフが自分の前でそれを抜いた事などなかったし、ましてや人を切りつけるなど。

けれども今、それが決して飾りではなかったのだと知った。

「……怪我は」

こういう状況でもリーフはリーフだった。

相変わらずの淡々とした物言いに、何故かほっとしつつ、アデイの胸に湧き上がったのは罪悪感だった。

大丈夫、と首を振りつつ、しがみ付く手に力を込める。

今までも、こうして助けてくれていたのだろうか。ふと、そんな事を思う。

自分の知らない場所で、時として傷を負いながらも、一人きりで戦っていたのだろうか？

「…おのれ!!」

怒りで我を失ったのか、ゴードに剣を突きつけていた男がこちらに向かって来る。

椅子を蹴散らし、向かって来るのをリーフは慌てた様子もなく、庇うように片腕を自分にしがみ付くアデイの身体に回した。

…キーンツ!!

男の一撃を片手で受け止めると、鋭い音が響く。その音にびくつとアデイの肩が揺れた。

「…っ、リーフ……!!」

不安そうな顔で見上げてくるアデイへ、リーフは落ち着き払った声だけを返した。

「見るな。…じっとしてる」

目的はアデイの身柄であるはずなのに、攻撃を仕向けてくる辺り、冷静さを失っているらしい。アデイが巻き込まれて怪我をしたなら、相応の叱責しっせきを受けるに違いないのに。

あるいは気付いたのだろうか。

フレルを追いかけた彼の仲間が、すでに自分の手によって倒された事を。

あのワインの壺が割れる音が合図だった。

追いかけてくるだろうとは思ったが、正面を見張る者まで出て来てくれたのは、実にありがたい誤算だった。彼等が己を過信していたと言えばそれまでかもしれないが。

フレルが合図をするとそのまま裏へと誘導するによつ逃げ、出てきた所をリーフが仕留めた。

命までは奪っていないが、今頃は見心地の悪い夢でも見ている事だろう。

その後フレルと共に倉庫にあったロープで縛り上げ、時を見計らった。残った二人が、苛立って注意力が散漫になって行くのを。

たっぷり半刻、流石にヤキモキしているだろうという頃合を見計らい、リーフとフレルは次の作戦に出た。

二手に別れ、リーフは正面に、裏口にフレルが残り、再び大きな音を立てる事で正面に対する意識を反らしたのだ。

アデイとゴードの無事さえ確保できれば、遠慮はいらない。出来る事なら知られずにいたかった真実を、アデイに知らしめたツケを払って貰うだけだ。

アデイを庇いながらでは、どうしてもその動きは制限されてしまうが、目の前の男がどういう行動に出るかわからない以上は手放す事は出来なかった。

それに、先程切りつけたアデイを拘束していた男は、苦しげに蹲すくつたままだ。

浅いとは言え、その代わり範囲は広い。肩口から斜めに走った傷跡に沿ってその背は赤黒く染まり、相応の出血を見せている。

当分動けないと思うが、万が一アデイを離して、再びその身柄を奪われる事は避けたかった。

ブン、ブンッ！！

空気を切る鈍い音と共に、男はやみくもに剣を振り回す。冷静さを失っているだけでなく、こうした場数をあまり踏んでいないに違いない。

そうした一撃を返し、あるいは避ける事はそう難しい事ではなかった。

…ガッ！！

「!?!」

やがて勢い余った男の剣が、振り下ろした先にあった椅子の背に食い込み、男が顔色を変えた。

すぐに剣を取り戻そうとするが、力任せに振り下ろしたそれが簡単に取れるはずもない。

「う、うわあああッ!!」

蒼白の顔でしばし剣とリーフを見比べていた男は、さらに自暴自棄になり、今度は殴りかかってきた。

そこに。

「リーフさん、危ないッ!!」

ガシャン!!

「……!?!」

その瞬間、男は何が起こったのかわからないような顔をした。

そのまま衝撃が走った自分の後頭部に手を動かし、そこが赤い何かでぐつしよりと濡れているのを確認すると、そのまま目を回してどさりと床に転がった。

「…見事な腕だ」

予想外の事に虚を突かれたのはリーフもだったが、すぐに彼は賞賛の声を上げた。

視線を向けた先、カウンターの向こうで腕を振り下ろした体勢のゴードが、その淡々とした声にはっと我に返る。

「え、あ……っ」

無意識の行動だったのか、我に返ったゴードはおろおろと自分の手と床に転がった男を見比べる。

傍目には防戦一方だったリーフを助太刀せねばと思ったゴードが、近場にあったワイン壘を掴んで男に向かって投げつけたのだ。

結果、見事に殴りかかった男の後頭部に炸裂した訳だが。

「…あの、死んでませんよね……？」

今更ながらのその言葉に、ちらりと床に倒れている男の顔を見たリーフが大丈夫だ、と言葉少なに答えると、ゴードは心底ほっとしたようにため息をついた。

赤い液体が床に広がっているが、それは壇の中に入っていた赤ワインで、男の血液ではない。

後で掃除が大変かもしれないが、すでに先程フレルが裏口付近で盛大にワインを壇ごとぶちまけた後だ。手間は大きく変わらないだろう。

「…警吏隊を呼びますか？」

ゴードがおそらくこの場で最も適切な言葉を口にしたが、リーフはしばし考え込んだ後、ゆるりと首を振った。

「呼んだ所で、多分無駄になる」

「え？」

リーフの目は、未だ蹲ったままこちらを忌々しげに睨んでいる男の顔を見ていた。

警吏隊という言葉にさほど動揺が見られなかったのは、精神的な訓練の賜物か、それとも何が理由があるからか。

おそらく後者なのだろうとリーフは判断した。

「トワルは旧アディア…シャウルドとマザルークの緩衝地帯だ。ゴタゴタは好まない。場合によってはこちらが悪人にされるぞ」
「……！」

その可能性に言われて気付いたのか、ゴードの顔色が変わった。

そして床に転がる男と蹲った男を交互に見つめる。

その素性はわからないが、恐らく彼等がマザルークの軍に連なる人々である事は確かに違いない。

卒倒した男が、蹲っている男の事を『隊長』と呼んだ事からも、

正規の兵士である可能性が高い。

マザルークの兵士に対してこれだけの無礼を働いたのだとしたら、相手が悪いのだとしてもこちらが加害者として扱われる事は想像に

難くない。

現に今までも、マザルークの兵士が何らかの事件を起こし、それを訴えた側が泣き寝入りした事や逆に営業権を剥奪されたりした事もあった。

「……ではどうしたら……」

考え込むようにゴードが呟いたその時だった。

「ゴード……!」

裏口の辺りで悲鳴のような声があがったかと思うと、亜麻色の髪をした女が店内に飛び出してきた。

フレルだ、とその場にいた人間が認識した時、赤い花が彼女の胸から咲いた。

「……ッ、フレルさんッ!？」

アデイが思わず叫ぶ。

ゴードは何が起こったのかわからない様子で、呆然と彼の前に壁になるように立ち塞がった背を見つめた。

まるで人形のように、フレルの体が崩れ落ちる。

その胸に突き刺さっていたのは、床に転がっていたワイン壺の破片だった。

比翼の鳥（13）

見る間にフレルのクリーム色したブラウスの胸元が赤く染まっ
てゆく。今度こそワインなどではなく、本物の血だ。

「…チツ！ 仕留めそこなつたか……」

呪うような声が床の方から聞こえ、彼等の目が一斉に蹲すくまっていた男に向かう。

一瞬とは言え、油断していたのは事実だ。背中せなかの傷が浅かった事も理由の一つだろう。苦痛に顔を歪めながらも、男は腰の剣を抜こうとしていた。

先程の警吏隊の話で動揺を見せなかったのは、単に諦めていなかっただけなのだ。関係者の口を全て封じる気で。

「…貴様……！」

咄嗟にリーフが手近にあった植木鉢を投げる。動けない男は避ける事もできず、利き腕に一撃を受け、剣を取り落とした。

今度は手加減などまったくなく。土の入ったそれは鈍器にも等しく、男はうめき声をあげて腕を抑える。

「アデイ、フレルを……！」

「う、うんっ」

リーフの声に従い、アデイがフレルの元へ駆け寄る。

そのままリーフは男の元へ動き、床に転がった剣を蹴飛ばすと同時に、そのまま自身を食らわせて意識を奪った。アデイを取り戻した事で安心したばかりに、と自分自身へ苛立ちを抱く。

再び同じ事が起きないように、先程倒れた男と共に店の隅へと運び、近場のカーテンを裂いてそれぞれの手首を縛り上げた。

（ど、どうしよう……っ）

対するアデイは、フレルを抱き上げまではしたものの、そこから何も出来ずにいた。破片自体は大きくはなかったが、引き抜くには勇気がある鋭い輝きを秘めている。

倒れた拍子に頭を打ったのか、意識もないようだ。ぐったりと重い身体に、泣きたい気持ちになる。

(これも、あたしのせいなの……？)

自分が、アディアの王女だから。だからフレルがこんな事になってしまったのだろうか。

その時、ようやく我に返ったゴードが震える声でフレルを呼んだ。
「フ、フレル……！！」

その顔色は蒼白で、不自由な足を引き摺って必死にこちらへと近寄ってくる。

「フレル…フレル……、しっかりするんだ……！！」

跪き、必死に呼びかける。その声に反応して、フレルが微かに目を開いた。

「フレル……！」

「フレルさん、しっかりして！！」

ゴードとアディアの声に、フレルはうつすらと微笑んだ。その唇が苦痛で掠れた声を紡ぐ。

「…ド、無事……？」

「ばかな事を…どうして僕を庇ったりなんか……！！ 待ってくれ、い、今すぐ医者を呼ぶから……！！」

はっと我に返った様子でゴードが立ち上がるうとするのを、男達を縛り終えたリーフが引き止めた。

「俺が行く。近所の人間に頼んだ方が早いだろう。あんたは側についていた方がいい」

「で、でも……！！」

「落ち着け、致命傷じゃない。…急所は外れている。破片は医者が来るまで抜くな。体内に欠片でも残ったら大変だからな」

こんな状況でも自分を失わないリーフのてきぱきとした指示は、この場においては的確と言えるものだった。

その言葉に多少は冷静さを取り戻したのか、ゴードが引き下がる。そのままリーフは店の扉に向かい、ちらりとアディアに視線を向け

た。アディはフレルを支えるのに必死で、彼の視線には気付かない。この場に残しても大丈夫だろうか、とふと思いついた考えを振り払い、リーフは夜の闇に沈んだ外へと飛び出していった。

+ + +

付近の住民の協力で、医者はずぐにやって来た。

店の中に入った途端、その惨状に目を見張ったが、流石は医者だ。すぐに自分を取り戻すと、傷付き倒れたフレルの元へ向かう。

「ほれ、そこのお嬢ちゃん。ちよつとそこを退いてくれ。ふむ……。硝子か、ちと厄介だな。ここで応急処置をせねばなるまい。…おい、ゴード。気持ちはわかるが、ぼさつとしてないで消毒用の湯を沸かせ！」

医師の一喝に、ゴードが青褪めた顔を上げる。その手がぎゅつと医師の骨ばった手を握った。

「な、何だ、いきなり!!」

ぎよつと身を竦める医師に、ゴードは縋るような目を向ける。

「マリウス先生……。フレルを、必ず助けて下さい……。!!」

「わ、わかっておるわ! いいからさつさとこの手を離して湯を沸かさなか!!」

「フレルは…僕が一番苦しい時に支えてくれた恩人なんだ。だから……!!」

「だから助けたければだな、」

「あ、あのっ、あたしがやります!!」

見るに見かねて、アディが代わりに湯の準備をしに、カウンター向こう側にある厨房へと入る。

どの程度の湯が必要なかわからなかったが、取り合えずすぐにいるのだろうと考えて、小さめの鍋に水を入れる。

店を締める前だったので、まだ火の気は消えていない。

大きなかまどの使い方などよくわからなかったが、火から起こす

訳ではないのなら何とかなる。

先程食事中に見たゴードの姿を真似て、水の入った鍋を火にかけるとまたフレルの元へと戻る事にした。湯が沸くのをじっと待ってられない気分だったからだ。

ようやくゴードの手から解放された医師がリーフと何やら話していた。何があった、などという言葉の断片から、状況を聞いているのだろう。

一瞬、ひやっとしたものを感じたのは、自分が旧アディアの王女かもしれない事を思い出したからだ。

まだ信じられないし、人違いだとは思っけれども、そうでないなら何の為にフレルは傷付き、この店もこんなにひどい有様にならねばならなかったのか。

ズキリと胸が痛んだ。

自分が王女であろうとなかろうと、この事態を引き起こしたのは紛れもなく自分なのだ。

先程のゴードの言葉が耳に甦る。

『僕が一番苦しい時に支えてくれた恩人なんだ』

その言葉を聞いた時、ああ同じだとアディは思った。

ゴードとフレルがどんな関係にあるのか、実際の所はわからないけれど、フレルはゴードにとって自分にとってのリーフと同じ存在なのだ。

…かけがえのない『存在』。

(…助かって)

リーフの言葉を信じるのなら、フレルは多分適切な処置さえすれば助かるだろう。それでもそう祈らずにはいらなかった。

「…アディ？ どうした、顔色が悪い」

はっと我に返ると、いつの間にそこにいたのか、リーフが相変わらずの無表情で自分の顔を覗き込んでいた。

「な、なんでもないよ!」

「そうか?」

「うん。あ、あの…リーフ…その……」

ふと、確かめたい衝動に駆られる。

(あたしは本当に旧アディアの王女なの?)

きっとリーフは何もかも知っている。そんな気がしてならなかった。けれど。

「お医者さまには、なんて説明したの?」

結局、問う事は出来ずに別の事を口にする。

…そうだと肯定される事が怖かった。

そんなアディアの心境を見透かしてか、リーフが一瞬物言いたげな顔をしたものの、すぐに表情を改めてアディアの質問へと答える。

「賊が入って暴れた、と説明したが」

「賊!?!」

「それ以外に何が言える」

「でも、だって…あの人達が違うって言うたら……!!」

言いながら、店の隅でまだ伸びている二人の男達に目を向ける。

彼等が自分を狙ってきたと言えば、リーフの嘘はたちどころにバレてしまう。

しかし、リーフは平然としたものだった。

「言う訳がない。奴等は秘密裏に事を運びたがっていたんだろう。」

こんな所でペラペラと話すとは思えない。むしろ賊として身柄を押しさえられれば、しばらくはここを狙う事もないだろう。…これだけの人間に面が割れてはな

確かに医師を呼ぶ際に、付近の住民がいくらか集まってきていた。見世物ではないという医師の言葉で、店内にまでは入ってきていないが、どんな奴等がこれをやったのかと、興味津々で店の隅で縛られている男達や、裏にまとまって伸びているその仲間などを見ている。

この様子では、誰かが警吏隊を連れて来るのも時間の問題だろう。

出来ればあまり事を大きくしたくなかったが、こればかりは仕方がない。

彼等がマザルークの正規軍だとするなら、決して友好的とは言えない隣国領内での揉め事は避けるはず。今はそれに賭けるしかない。

もちろん、そう簡単に事が運ぶとは思えないし、根本的な解決にならない事は確かだが。それでも時間稼ぎにはなるだろう。

「でも……っ」

それでも納得の行かない様子のアディに、リーフが静かに尋ねた。

「それとも、正直にお前を狙ってきた輩だとも言う気か？」

「……！！」

真っ直ぐな瞳は、心の奥底まで見透かすかのようで。アディは息を飲み、返す言葉を失った。

（だって、あたしのせいだもの）

言葉にならなかつた思いは、心の中に重く沈む。

（あたしがここに来なかつたら、フレルさんはあんな目に遭わなかつたはずなのに）

凍りつくアディに、リーフは小さくため息をつくとき、ポンと頭を軽く叩いた。

「気にするな。お前のせいじゃない」

「……リーフ……」

きつと今、泣きそうな顔をしていると思う。縋るような顔をしていると思う。けれどもやはり、こんな時に頼れるのは彼しかいない。

いくつになつても子供みたいだ。そんな事を思いながら、目の前の身体に抱き着いた。

「フレルさん、大丈夫だよね……っ？」

怖い。

あんな風に、血を流して倒れている人を直接見たのは初めてで。どんなに大丈夫だと保証されても、安心なんて出来なかつた。

ダツテ、人八簡單二死又。

(……………?)

ふと脳裏に浮かんだ不吉な言葉に戸惑う。

今まで人の死に立ち会った事なんて一度もないはずなのに、どうしてそんな事を思うんだろう？

まるで 昔、人が呆気なく死んでゆく場面に遭遇した事があるみたいに。

リーフが珍しく宥めるように背を撫でてくれる。けれど、いつもならそれで落ち着くはずの心は乱れたままだった。

激しい嵐が通り過ぎた後のように。

比翼の鳥（14）

天から降り注ぐ雨。

まだ明るいはずの時分なのに、世界は暗く沈んでいる。

音を立て、激しく地面を穿つように叩きつける雨の雫は、何をそんなに嘆いているのか。

それは、激しい慟哭にも似て。

…涙を持たない自分の代わりに、天が泣いてでもいるのだろうか。そんな事を思う。

大地はその涙を受けるがその全てを受け止める事は出来ず、たちまちその場はぬかるみ、行き場のないそれは溢れてその場に溜まる。まるで 自分の行き場のない感情のように。

「 どうした。随分顔色が悪いようだが？ 」

「 ……。そういうあなたは普段と変わりないようね 」

心配など欠片もしていないくせに、礼儀のように声をかけてきた『同僚』に、彼女は冷え切った口調で言い捨てた。

その目は声の方ではなく、その眼下を食い入るように見つめている。

「 そんなに見つめても、事態は変わらないだろう。現実を見るんだな、フリーユリー。この程度の事でいちいち心を惑わせていては、務めは果たせないぞ 」

「 ……」

同僚の言葉は容赦なく、そして同時に事実でもあったが故に、彼女は反論せずにただその唇をきつく噛み締めた。

視線の先には、少し急勾配の山道。幅はそれほど狭くはないが、道の片側は切り立った崖わたちになっている。

その道に刻まれた深い轍わたちの跡は、激しい雨を受けてもなおそこにくつきりと線を描いていた。

山の麓から昇っていたそれは、途中からありえない方角へと進み、

崖に向かって伸びていた。

ふつり、と断ち切られたように途切れた線。

…カラカラ…カラ…

轟音にも等しい雨音の隙間を擦り抜けて、虚ろに空回りする車輪の音が聞こえてくる。

深い茂みと木々に隠されてはつきりとは見えないが、人間と異なる彼女の目には、その下で今、その生を終えようとしている若い夫婦の姿が見えていた。

まるで壊れた人形のように、馬車の残骸の狭間に転がっている。どちらもびくりとも動かない。

「…終わったようだな」

「っ！」

やがて何の感慨もなくぽつりと呟かれた同僚の言葉に、彼女は弾かれたようにそちらに目を向けた。

そして その手にぼんやりと光る球体を見つけて息を飲む。

「……」

それが意味する事はただ一つ。

同僚が守護していた人物 夫婦の内、妻の方がその生を終えたということ。

過去に幾度も、自分もそうした光を手にした事があるのに、何度見ても衝撃を受けずにはいられない。

この世の何処からも、『彼女』が存在しなくなるという現実には。

目に見えて硬直し、動揺を隠せない彼女に、同僚 役目を終えたばかりの守護天使の一人は、何処か嘲笑するような表情を浮かべた。

「何を驚く。こうなる事は、彼等が生まれた時から決まっていたと知っていただろう」

「……」

「今日、この時　　セイネとゴードが死ぬ事を、お前が知らなかったとは言わせないぞ」

だからとつくに心の準備は出来ていただろう、と言外に告げる言葉に、彼女は肩を震わせた。…怒りの為に。

「…なん…で…!!」

何故、そんなにも人の　　生まれた瞬間から見守り続けた人間の死を、あっさりを受け流す事が出来る？

自分達は『守護天使』ではなかったのか。

見守る人間が出来るだけより善く生きるよう、導く事が役目ではないのか。

…確かに、この結末が訪れる事は前から知っていた。避けようもない事も。

何故なら人の運命は、特異な条件の下以外は決して分岐する事なく、一つの道を進むから。

だが、だからと言ってその未来をあっさりを受け入れられはしない。喪う痛みが消える訳でもない。

決して短くはない時間、見守り続けた命が目の前で消えて行く。手を出す事も許されず、ただ見ている事しか出来ないこの口惜しさを、どうして彼は…否、多くの天使は持たないのだろう。

「確かに人は、愚かな過ちを繰り返す。何度も、何度も…」

けれど、喪われた命はもう二度と戻っては来ない。『セイネ』という人間は、今のこの時代にしか存在しない、たつた一人の人間なのに…それを惜しむ事すら出来ないあなたに、『守護天使』の名を語る資格などないわ…!!」

鬼気迫る表情で叩きつけられた言葉に、同僚の天使は呆れたような目を向けてくる。

それは　　いつだったか、偶然顔を合わせた上位天使の目を思い出させた。蔑むような　　理解出来ないという瞳。

一気に空しさが胸に湧き上がる。

無駄なのだ、と。どんなにその事を訴えたとしても、彼等の心を変える事は出来ないのだと。

それでも彼と自分は同じ存在で、どんなに悲しみを覚えても、この身は涙を流す事も出来ないし、危険が迫り助けたいと願っても、守護する人間に触れる事も出来なかった。

彼等に自分と同じ価値観を持つて欲しい訳ではない。自分が絶対に正しいと思っている訳でもない。

それでも 彼等の有り方を否定せずにはいられなかった。間違っていると訴えずにはいられなかった。

生まれては死んでゆく人間を、幾度も幾度も見送って。

その全てが善人であった訳ではないけれど、気がつけば彼等を愛していた。彼等は自分の存在を知る事はない。それでも、心を傾けた。

「わたし達の方が、劣っているのよ。大切なものも、自分の一生をかけて追いかける夢すらも持てないわたし達の方が。『天使』なんて称号で特別な存在のように思い込んでいるだけ……！」

守護天使の一生は、人のその何倍も長い。そして飢える事もなければ、乾く事もない。

おそらく、それは人間にとっては『素晴らしい』こと。

けれど彼女には、決して長くはない時間を鮮やかに生きる人間の方が、生き物として何倍も輝いていると思った。

… ドクン……

「…っ！」

不意に鼓動が聞こえた気がして、彼女は弾かれたように地上へ目を戻した。

鼓動が聞こえるという事は、守護する人間の命が尽きようとしている証。生まれて来る時と死ぬ時に、彼等の鼓動はひときわ大きく聞こえてくる。

それは始まりと 終わりを告げる、合図。

「…いや……」

「 フリユウリー? 」

「 嫌よ、もう喪いたくない…見送りたいくない… 」

「 待て、フリユウリー…何をやる気だ…!! 」

彼女の様子に只ならぬものを感じ取ってか、同僚がその腕を伸ばして彼女の手首を掴もうとした。

だがそれよりいち早く、彼女の身体は地上へと向かっている。

「 ツ、フリユウリー! 」

呼びかける声を無視して、彼女の身体は地上へと飛んだ。

覆いかぶさる枝葉を通り抜け、馬車の残骸に埋まるように横たわる男 彼女の守護する人間の元へ。

まだ…間に合う。そう彼女は思った。

まだ魂は彼の体の中にある。それがあつ内はまだ彼は死なない!

「 …フリユウリー、やめろ!! 」

追いかけてきた同僚が焦った声をかける。けれどその声はもう彼女には届かなかった。

ばさりと彼女の背の白い翼が包み込むように広がった。それはたちまちばあつと飛び散り、純白の羽は土と雨に汚れた男の身体に降り注ぐ。

「 …わたしの、力をあげる 」

死へ傾いた運命を、捻じ曲げる。その罪深さを知りながら、それでも彼女はその道を選んだ。

背の羽が消えるにつれて、同僚の声も姿もまったく見えなくなり、代わりに与えられた肉の器に閉じ込められた身体は、冷たく降り注ぐ雨に打たれる。

重力に支配された身体は重く、慣れないその感覚を受け入れる事が出来ずに、そのまま彼女はぬかるんだ地面へと膝をついた。

濡れた服と髪がこんなにも気持ち悪いものだとは思わなかった。

こんなにも雨が冷たいものだなんて知らなかった。

けれどそれは同時に、彼女に教える。

もう、いつ果てるかわからない生をもてあまし、幾人もの死を見届ける必要はないのだと。

「…ゴード……」

這いつくばったまま、彼女は己の力を与えた男に近寄る。

雨によってあつという間に冷え切った体は、思うように動かない。もどかしい思いでやっと触れられる所にまで近寄ると、そろそろと指を伸ばし、その顔に触れた。

…初めて触れた感触に、胸がいっぱいになる。

それは　感動。

ずっとうとうとして、彼等に触れてみたかった。抱きしめたかった。

…見守るだけではなくて。

青褪めた顔に不安になり、心臓の辺りに耳をつけると、冷たい布越しに弱いが確かに息づく命の音が聞こえた。

その瞬間、何か不思議な感覚がして、彼女は身を起こし首を傾げた。

ぼたり、と見下ろした掌に落ちたのは、雨ではなく熱い雫。

…それが自分の目から零れ落ちたものだと思い付いた時、彼女は無意識に自分の身体を抱きしめていた。

もう二度と、死の運命からは守る事が出来ないけれど。

幸せだと思った。この身にどんな事が起ころうと、きつと後悔はしないだろうと確信できた。

自分は、欲しかったものをようやく手に入れる事が出来たのだから……。

比翼の鳥（15）

迅速な対応が功を奏したのか。

フレルの傷は出血の割りには深くもなく、肺などの身体の重要な器官を傷つけるものではなかった為、夜半を過ぎる頃には治療も完了した。

「後は安静にして様子見だな」

リーフと共にフレルを寝台まで運んだマリウス医師は、額の汗を拭いながらそう結論した。

医師が到着する前に意識を失っていたフレルは、治療中一度も意識を取り戻さなかった。

倒れた際に頭を打った可能性があるが、倒れてしばらくは意識があつた事もあり、簡単には結論出来なかつたのだ。

医師が帰ってしまってしまうと、店の中が急に静かになった。今までの慌しさが通り過ぎて、一気に気が抜けたような感じだろうか。

押し入って来た男達も先程警吏隊に連行されており、ひとまずは平穏が戻つたと言えた。

だが、そこに漂う空気は重かつた。その原因の一つであるゴードは、店の片隅の椅子に座り込み、フレルの治療中もずっと口を開いていない。

何処か思いつめたようなその顔色は悪く、今にも倒れてしまいそうにも見えた。

「…取り合えず、片付けた方が良さそうだな」

おそらくこの場でもっとも建設的な意見をリーフが提案すると、ようやくその顔を上げた。

確かに店の中は荒らされたままで、床にはまだ割れた硝子の破片が散らばっている。このままにしておいては危険だし、何より仕事も再開出来ない。

「そう、ですね……」

ようやく重い腰を上げ、ゴードは片足を引き摺りながら本来の定位置である厨房へと向かう。

「それじゃあ、僕はここを片付けます。済みませんが、リーフさんとアデイは店の中をお願い出来ますか？」

顔色はそのままに、ゴードが指示を出す。二人に異論はない。すぐさま三人は作業に取り掛かった。

黙々と、片付けに精を出す。

時刻だけを考えれば、部屋で休んでも良かったのだろうが、三人が三人ともとても寝ていられる心境ではなかったのだ。

ゴードはフレルの安否に気を取られ、アデイは自分自身の身の上について思い悩み、リーフはアデイに対してどう説明すべきかを考えながら、割れた破片を拾い、倒れた椅子やテーブルを元通りに起こす。

その結果、夜が明ける頃には全てを完全に、とまでは行かないが、あらかた片付ける事が出来た。

外が白々と明るくなって行く。それを切っ掛けに、ようやく手を休めてそれぞれが休息を取る事にした。

一足先にアデイが寝に行き、リーフがその場に留まる。不思議そうな目を向けて来るゴードへ、リーフは静かに口を開いた。

「…迷惑をかけた。済まない」

「リーフさん……？」

思いがけない言葉だったのか、ゴードの目が軽く見開かれる。

そこには責める感情は欠片もない。まったくそんな事にまで考えが及んでいなかったという表情だった。

「謝って済む問題ではない事はわかってているが……俺の責任だ」

「何を言っているんですか。確かに……今回の事はとばかりと言えばそうなのかもしれませんが……あなた方をここに連れて来たのはフレルだし、客と認めたのは僕です」

「しかし、」

「むしろ今回は、あなた方も十分被害者ですよ。本来は客なのに、」

店の片付けまで手伝わせてしまいましたしね」

そう言って苦笑するゴードに、リーフはゆるりと首を振った。ゴードが受けた被害を考えれば、とても足りるとは思えなかった。

あらかたは片付いたとは言え、修理が必要なものもあるし、ワインを筆頭に買い足さなければならぬ物がいくつもある。しばらくは商売にならないはずだ。

流石のリーフも、目の前の惨状を前に良心が痛んだ。

「…これくらいは当然だ」

「そう言ってもらえると助かります。きっと、僕一人だけだったらしばらく手付かずだった気がしますからね」

ふと、そこでゴードが表情を消す。視線を床に落とし、彼は小さな声で呟いた。

「…どうもね、駄目なんですよ。女の人が、傷付いて倒れるのは」

それは、彼の中に今もまだ生々しく残る傷。フレルが傷付いた事は、普段は奥深くに沈んでいるそれを揺さぶり起こすのに十分だった。

どう相槌を打って良いのかわからないリーフに構わず、ゴードは続ける。

「もうあれから何年も経つのに…引き摺るものですね」

ため息を零し、そして視線は床から、言う事を聞かなくなった片足へと向かう。過去に繋がるものへ。

「実は以前、僕は妻を亡くしているんです。この足も、その時に動かなくなりました。結婚して、間もない頃です。二人でここから山を一つ越えた所にある村へ、人を案内した帰り道でした」

行きはよく晴れていて、雨の気配は何処にもなかったのに、帰る途中で天候が急に変化した。

山の天気気まぐれなのは、いつもの事だ。特に珍しい事ではない。

丁度、険しい山道に差し掛かった辺りで、ついに雨が降り出した。その村とは行き来する者も多く、トワルで生まれ育った彼には慣

れた道だ。トワルまでは、目と鼻の先。この山道を抜ければすぐに街道に出る。

そんな場所だったのも、原因の一つだったのかもしれない。「ひどい雨でした。途中で止まって様子を見ようにも、周囲がよく見えない程でした。それどころか、益々ひどくなりそうで、先を急いだ方が良いと決めた時、すぐ近くに雷が落ちたんです」

光。轟音。地響き。馬車の中から、妻の悲鳴。

馬も驚きと恐怖で、激しく嘶いななき、暴れ出す。

いけない、と思った時には遅かった。馬を制しようと握りなおした手綱が、雨で滑る。

それは、ほんの僅かな時間の出来事だった。

「僕と妻は、馬と馬車ごと崖の下へ落ちました。御者台にいた僕は地面に投げ出され、妻は……」

馬車の中にいた事が災いしたと、後で状況を調べた役人から聞いた。

落下の衝撃で馬車は木っ端微塵になり、それら全てが中にいた彼の妻の身体に押し掛かったのだ。

おそらく、即死に近かっただろうと役人は語った。けれども、それが何の慰めになるだろう。

二度と目を開かない彼女の、包帯に包まれた体が目に焼きついて離れない。それは手当ての為のものではなかった。その身が負った無残な傷を隠す為のもの。

「…ああ、そう言えばその時にフレルに会ったんですよ」

「フレルに？」

「ええ。丁度そこに行き合った彼女が僕を見つけてくれて、トワルまで人を呼びに行ってくれたんです」

「……」

そういう事か、とリーフは心の内で納得した。

恐らく、その時ゴードも死ぬはずだったのだろう。そしてフレルはその運命を捻じ曲げた。自分がアディの死を前に、そうした

ように。」

「フレルにはとても感謝しています。彼女がいなければ、多分…僕はここまで立ち直れなかったと思いますから」

再び視線を持ち上げると、ゴードは軽く肩を竦めて微かに苦味の漂う笑みを浮かべた。

「変な話かもしれないけれど、フレルと顔を合わせた時に、何故かとても良く知っているような気がしたんです。…こういう事を言うと、変な誤解をされてしまいそうですが」

「…誤解……？」

「ええ。フレルは妻でも恋人でもありませんからね。強いて言うならば、兄妹と言うか…家族みたいなものかな……」

「……」

それは取り繕う訳でもなく、純粹に思った事を口にしたような言葉。

実際、彼はそう思っているのだろう。そしてそう感じる事を否定は出来なかった。

目に見えず、存在すら感じていなかった。それでも無意識の部分で気付いているのだ。フレルが生まれた時から側に居続けた存在である事に。

「だから彼女には、誰よりも幸せになってもらいたいと思っているんです。一番僕が苦しい時に助けてくれた人ですから」

リーフはゴードの言葉をただ黙って受け止めた。

心の内で、自分たちの在り方を重ね合わせながら。

比翼の鳥（16）

身体が重い。

最初の頃に比べると、随分重力の重みには慣れたはずなのにどうした事だろう。まるで、胸の上に石でも乗っているようだ。

重苦しさはやがて息苦しさを伴い、フレルはその苦しさで目を覚ました。

（……？）

目に飛び込んできた周囲の様子は随分と薄暗かった。一体、今がいつ頃なのか判断がつかないが、どうやら昼間ではないようだ。

相応の年月を経た天井の木目に見覚えはなかったが、漂う空気はこの数年で慣れ親しんだ場所のもの。

一体、何処の部屋だろう。少なくとも、自分に与えられていた部屋ではない。

確認しようと、特に考えずに身を起こそうとして　たちまち胸部を走った、呼吸も止まりそうな痛みに再び寝台へと沈む。

（い…っ、いったああ……っ）

悲鳴すら上げる事の出来ない、不意打ちの激痛で、フレルはようやく目を覚ます以前の事を思い出した。

（そうだわ、わたし…ゴードを助けようとして……）

表側が静かになつたので、全てが片付いたのかと様子を見に行つた時、床に蹲すくまっていた男が硝子の破片を手に取るのを目撃して。

男の視線がゴードに向かっている事に気付いた瞬間、後先を考えずに飛び出していた。

助けなければとか、守らなければとかそういう思考すらない、ほとんど無意識の内の衝動的な行動だった。我ながら無茶をしたものだと思う。

けれど…破片を受けた時、痛みよりも奇妙な悦びを感じた事もまた事実だ。

悦び　　むしろ、充足感と表す方が近いかもしれない。

もはや、未来を見通し導く力を失くし、ただの人間の女になってしまった自分でも、まだ彼を守る術があったのだ、と。自分にも彼のためにまだやれる事があるのだと。

どうにか痛みをやり過ぎ、そろそろと目を胸元に向け、指で刺激しないように気をつけながら触れると、木綿の寝着の下に硬い包帯の感触があった。

(…傷、深かったのかしら)

取り合えず重苦しく感じていたのは、この苦しい程に締め付けている包帯のせいだろう。呼吸が無理なく出来ているという事は、肺などが傷付いている訳ではないという証だろうか。

…もしかすると痕が残ってしまうかもしれない。そんな事が頭を過ぎり、小さなため息をつく。

自分はそのな事は気にしないが(むしろ名誉の負傷という感覚が強い)、ゴードが気にするかもしれない。何しろ、目の前で彼を庇ったのだ。

自分のせいだと思うかもしれない。それを思うと、いささか気が重い。

せめて女の身でなければ良かったのだろうが、困った事に今の自分は年若い女性の姿だ。しかも、嫁(行く予定もつもりもないが)入り前の。

それだけでも、大抵の人は責任を感じるに違いない。負い目なんて…感じて欲しくはないのに。

ゴードは優しい。

妻を喪い、足を負傷し　　生きる気力もなかったはずの状況で、急激な変化に耐え切れず衰弱していた自分に部屋を提供し、彼等を発見した事になっていた自分へ、感謝の言葉すら口にした人間。

かつて自分がそうあれと願い導いた、数少ない善良な魂の一つ。

『ありがとう…あなたが通りかからなければ、僕は助からなかった』

あの言葉が、どんなに耳に痛かったか。

…意識を失っている間、懐かしい夢を見た。

あれは自分のこの手から、彼の運命が離れてしまった日の事だ。同時に自分が、『天使』ではなくなつた日でもある。

悲しみと、喜びと　　悔恨と決意が入り混じつた、幸福でありながらも思い出す度に苦みを感じる記憶。

その選択を選んだ事に対する後悔はない。けれど自分の取つた行動が、正しかったとも思っていない。

一人生き残つたゴードが、愛する妻　　セイネを喪つたと知つた時の、あの天を呪うような慟哭を見てしまった今は。

自分は彼の命を守る事は出来ても、その心までは守れなかったのだ。

幸せを祈っていたはずなのに、結果的には辛い思いをさせる事になつてしまった。…この上、 unnecessaryな心配や責任を感じさせる訳には行かないのに。

(…どう言えばいいのかしら……)

気にするな、と言っても気にしないはずがない。どうしたら

そう思い悩んでいると、カタンという物音と共に、部屋の扉が開く音がした。

思わず身体が強張つた。もし、ゴードだったら。

自分はどんな顔をして、彼を見ればいいのかろう？

「あ、フレルさん！　気がついたの!？」

しかし、予想に反して耳に飛び込んできたのは、そんな明るい少女　　アデイの声。

ゴードのものではなかった事にほっとしつつ、身体力を抜くとアデイが枕元にパタパタと駆け寄り、今にも泣き出しそうな顔で覗き込んで来る。

薄暗い部屋でも、アデイの特徴的なオレンジの瞳に宿るそれが、純粹な安堵な事はわかる。

「…良かったあ……。 あっ、傷！ 痛くないですか!？」
張りつめたものがゆるんだような、そんな軟らかさが言葉にある。
まだあどけなさが残るこの少女にもどれだけの心配をかけたのか
と、フレルの心も痛んだ。

「…ええ、大丈夫よ。アデイ」

安心させるように微笑んで見せると、アデイは泣き笑いのような
表情を更に緩めた。

本当に、あの鉄面皮男が守護していたとは思えない、感情表現の
素直な子だと思う。

「フレルさん、一日近く意識が戻らなかったんですよ。倒れた時に
頭を打っているからかもって、皆で心配してて…ああ、ほっとした
あ……」

「そう…心配かけちゃったのね。ごめんなさい」

「謝らなくていいですよ！ フレルさんは、何にも悪くないんだし
…あっ、ゴードさんに知らせなきゃ！！ すぐに呼んで来ますね！
！」

「え、あ……っ」

まだ心の準備も出来ていないのに、引き止める暇もなく、アデイ
はこれは一大事とばかりにあっと言う間に扉の向こうへ姿を消して
しまう。

そこでようやく、フレルは自分が寝かされているのがゴードの部
屋である事に気付いた。

おそらく、二階にある自分の部屋に運ぶのが大変だったからに違
いないが、同時に一日近くゴードが身を休める場所を占領していた
事になる事に気付いて、さらに居たたまれない気分になる。

同じ階には彼の両親がかつて使っていた寝室もあるので、おそら
くそちらで休んだのだろうが 基本的には使われてない部屋だ。
時折清掃はしていたものの、行き届いてはいなかったはず。

あるいは。

もう一つあり得る可能性に気づき、フレルの顔は強張った。

(寝て、なかつたりして……)

ゴードの気性を考えれば、大いにあり得る。

(…どうしよう、どんな顔をして会えばいいんだろう……)

胸の傷さえなければ、このまま逃げ出してしまいたい。けれど、逃げた所で事態が良い方向へ動く訳ではない事も確かだ。

やがて少し離れた所から、足を引き摺りながら近付いて来る足音が聞こえてくる。

どうやっても逃げられない事は確実に、フレルは覚悟を決めた。

比翼の鳥（17）

「フレル……！」

扉を開くのももどかしく、ゴードは開口一番に彼女の名を呼んだ。

「……ゴード……」

「ああ……良かった、本当に良かった……」

心底ほっとしたようにため息をつき、フレルが横になっている寝台へと歩み寄って来る。

「具合は？ 傷が痛んだりはしないかい？」

「ええ、大丈夫よ」

先程のアディとの会話の繰り返しのようなやり取りにフレルは苦笑する。

正直に言えば、まだ硝子が刺さった胸の傷はシクシクと痛みを訴えていた。だが、耐えられない程ではない。

フレルは努めて笑顔を浮かべ、心底心配そうな表情で自分を覗き込んでくるゴードに頷いてみせた。

「……店は？」

「取り合えず今日と明日は休みだよ。片付けもしないとならないけど、何より昨日で商売道具がいくつも駄目になってしまったしね」

そう言っただけを諫めるゴードの目には、心配と安堵の感情はあるものの、無茶な行動に出たフレルを責める色は欠片も見当たらない。

予想通りの様子にほっとすると同時に、フレルの表情は曇る。

「……フレル？」

「……ごめんなさい……」

やがて零れ落ちた言葉に、ゴードは軽く目を見開いた。

「どうして……謝るんだい？」

「……ごめんなさい、ゴード……」

驚きを隠さずに尋ねてくる彼から目を反らし、フレルは繰り返す。とてもまともに彼の顔を見る事が出来なかった。

ゴードは優しい。否、優しすぎる。

まさに『善良』という言葉をそのまま人の形にしたような人物だ。実際、彼が怒りに我を忘れるような事は知る限り一度もなかったし、誰かを責めたりする事もなかった。

でもそれは…ひよっとしたら、守護天使として導いたフレルのせいかもしれない。少なくとも、多かれ少なかれ影響があつたのは確かだろう。

（あたしがする事為す事、全てゴードを傷つけているんじゃないかしら……）

守りたい、幸せでいて欲しい　　心から願うそれに嘘偽りはない。

けれど……。

お人好しである彼は、街の人間に親しまれている一方で、ずる賢い一部の人間に利用される事もあつたし、妻には先立たれ、足には一生癒えない傷を負つた。

あの時、彼の命を助けた事はフレルにとっては幸いだった。けれど　その事はゴードにとっては不幸であつただろう。

目の前で愛する者を喪う苦しみ。取り残される絶望。
…それはフレル自身が何よりもよく知っているのに。

これから何事もなければ、彼はあと数十年は生きるはずだ。その間に彼は一体、何度生きている事を後悔するのだろうか。　。
（わたしは、彼に対して何も報いる事は出来ないのに）

店を手伝つたり、客寄せをしたり　　そんな事はフレルじゃなくても出来る事だ。それもまた手助けにはなっているだろうが、彼の心を癒すまでには至らないはず。

（ごめんなさい……）

身体を守れても、心は守れない。

本当は心こそ、守りたいと願っているのに。誰よりも幸福でいて欲しいと思うのに　　。

「…フレル」

と、不意に手に温もりを感じ、反射的に目を向けると、ゴードの大きな手がフレルの小刻みに震える手を包み込んでいた。

「もしかして、僕が怒っていると思ってる？」

届いた声は何処までも優しく、フレルは頭を振った。^{かぶり}

「いいえ、そんな風には思っていないわ」

「…じゃあ、どうして謝るんだい？ フレルは謝るような事は一つもしてないよ」

「でも……！」

こんな助けられ方をして、気にしないようなあなたではないでしょう？

そう続けようとして、フレルは言葉を飲み込む。いくらなんでもそれは、面と向かって言う言葉ではない。

何より、自意識過剰にも取られかねない。けれど、フレルの言いたい事を察したのか、ゴードは口元に苦笑を浮かべた。

「確かにフレルが傷付いた時、心臓が止まるかと思っただよ」

「……っ」

「でも、助けてくれた事には感謝してる。僕のこの足では、おそろく逃げ切れなかっただろう」

ぎゅっと、力のこもる手にあるのは心からの感謝の思い。

「でも、もう二度と…あんな事はしないで欲しい。自分の命を大事にして欲しいんだ。君にはたくさん助けてもらった。もう、十分助けてもらってる。…もし、何か僕に恩義のようなものを感じているのなら、それ以上のものを返してもらったよ」

「ゴード……」

「…だから、今度は僕が君に返したい。君には幸せになってもらいたいんだ、フレル」

言葉よりも雄弁に、触れた手から彼の心が伝わる。

（ ああ ）

胸が、詰まる。

(どうしてゴードは、わたしを嬉しがらせる事ばかり口にするんだらう)

それは天使であった頃には誰からも向けられる事のなかった言葉。守り愛し、慈しんでも一方通行でしかなかった思いに応えてくれる言葉。

やがて瞳からあふれた熱を、フレルは慌ててもう片方の手で拭いた。

「…ごめんなさい、心配させて」

結局またフレルの口から零れた謝罪の言葉に、ゴードは苦笑する。

「フレルはもつと、自分本位になっていいと思うよ」

言外にお人好しだと伝える言葉に、フレルもまた苦笑した。

彼は鏡だ。己の行いを映し出す鏡。

ならば 今、彼が穏やかに笑えているのなら、己の選択は間違いではなかったのかもしれない。たとえそれが、自己満足に過ぎないのだとしても。

「その言葉、そっくりお返しするわ」

いつもの調子がフレルに戻った事で安心したのか、ゴードは頷いた。

「ともかく今は傷を治す事に専念して…店の事は心配しなくてもいいから」

「ええ……」

再び店の方へ戻って行く背に、フレルは静かに決意を固めた。

(もう、ゴードは大丈夫。店も常連さんが増えだし、街の人達も彼を信頼してくれている)

フレルの焦茶色の瞳に、寂しげな光が浮かぶ。

(…頃合いなのかも、しれないわね)

そう、わかつていた事だ。どんなに願っても、ずっと彼の側にいられる訳ではない事は。

いつかは離れなければならぬ。他でもない、ゴードの為にも。

昨夜襲ってきた男達の事を思い、フレルは決意を固めた。

その『いつか』が思いがけず早く訪れただけ。しかもそれは、これ以上となく彼を守る事になるはずだ。

やがて閉じられたその目から、先程とは違う涙が零れたが、今度はそのままなめらかな頬を伝わり、枕に散った。

+ + +

襲撃から数日は、瞬く間に過ぎて行った。

荒れてしまった店の片付けや修理などの事後処理に忙殺された為だが、アデイもリーフも、あえてそれぞれの仕事に没頭する事で、考えたくない事から逃避しているようなものだった。

ゴードは店の調度品を整え、アデイはその手伝い、リーフは動けないフレルに代わって買い出しを担当し、顔は合わせるもののゆっくりと会話をするような事をお互いに避けていた。

そんな二人のぎこちなさの理由を察してか、ゴードは何も言わずにそっとしておいてくれる。実際、リーフにとってはその心遣いはありがたいものだった。

時折、アデイが向ける物問いたげな視線に　　どう答えればいいのか、彼はまだ迷っていた。

アデイがこの旧アディアの王女である事は、もはや隠していても良い事は一つもない。それははっきりと認めるべきだろう。

だが。

何故彼女を助け、これまで密かに守り続けてきたのか。その明確な理由を説明する事が、彼には出来ない。

全てを話す訳には行かないのに、かと言って、都合の良い嘘も吐けそうになかった。性格的に嘘が吐くのが苦手だというのもあるが、そうした事で嘘を嘘で塗り固める事態は避けなかったのだ。

それに　　リーフ自身、わからないのだ。

死ぬはずだったアデイの命を救った時も、それから後、共に旅を

するようになったのも、どうして自分がそうしたいと思ったのか、その理由が。

自分の事なのに、わからない。『そうすべきだ』と思った事は事実だが、そう思い至った理由が見当たらない。

自分でも不可解だと思っっているのに、正直に特に理由がないと答えて、アディは果たして納得してくれるだろうか。

(…そう言えば)

ふと、思い出す。

『わたし達が「守護天使」だって事は、誰にも知られては駄目よ。話すとか話さないとか、そういう次元の問題じゃないの』

それは襲撃がある直前にフレルが口にした言葉。

結局、当のフレルが負傷した事もあり、続きを聞く機会がないままに来てしまった。

フレルに言われるまでもなく、自分から真実を明らかにするつもりはなかったが、それ以外に何か重要な理由があるかのような口ぶりだった。

何故、守護天使であった事を知られてはいけないのか　アディからいろいろと尋ねられる前にフレルに話を聞いておいた方が良さそうだ。

少々悔しい事だが、元・天使に関する知識はあちらの方が詳しい。ちらりと視線をアディに向ける。

今はゴードと一緒に調味料などを棚に仕舞っているようだ。

特に許可はいらないとは思っのだが、何となく今までフレルを見舞う際にはゴードかアディが同席していて、フレルと一対一で話す機会がなかった。

当然ながら、尋ねたい事は彼等二人に聞かれる訳には行かない。

リーフはそつとその場を抜け出し、裏口からフレルの元へと向かった。

比翼の鳥（18）

リーフの姿が店内から消えた途端、あからさまに肩から力を抜いたアデイに、ゴードは思わず噴き出していた。

はっとしたように顔を向け、アデイはバツが悪そうに視線を下げる。

「随分、その、緊張してるようだね」

「……」

労わるようなゴードの言葉に、アデイは無言で小さく頷く。

あの襲撃から彼等の間がやたらとぎくしゃくしている事は誰の目で見ても明らかだ。アデイは何処かリーフに遠慮しているし、リーフは今まで以上に言葉と態度が硬化してしまっている。

一触発なその現状を、けれどどちらも変に壊したくないと思っているのだろう。

その原因であろう事柄 アデイが旧アディアの王女である

を思えば、ゴードも流石に口出し出来ずにいた。

実際の事情は第三者の彼にはわからない。

それ以前に二人の関係は、彼等二人で解決すべき事だろうし、事情をわかっていない人間がしゃしゃり出る場面ではないのも確かだ。二人が抱える問題があまりにもデリケート過ぎる。

「ごめんなさい…ゴードさん」

やがてアデイの口から、そんな謝罪の言葉がぼつりと零れ、ゴードは首を傾げた。

「ん？ 何を謝るんだい？」

「えっと、その…ゴードさんも大変なのに、雰囲気悪くしちゃって

……」

「ああ…、気にしてないよ」

一体何に対して謝っているのかを理解し、笑って見せれば、アデイはほっとしたように表情を緩めた。

「リーフっていつも何を考えているのかよくわからないけど、普段はあそこまでじゃないの」

何処か庇うような事を口にする、その表情は暗い。

「だから 多分、本当なんだと、思うんだ」

何が、が抜けていても、アデイの言わんとする所はわかった。ゴードも同意見だったからだ。

何かの間違いであるなら、とつくに否定しているはず。それをせず、それどころか触れて欲しくなさそうな様子を見せる事自体、それが真実であると言っているも同然。

おそらく リーフも、今更誤魔化そうとは思っていないのだろう。

「あたしが『お姫様』だって。…あは、なんか信じられないなあ」
困ったように笑う顔に、ゴードは何も言えなかった。

アデイアが滅んで、およそ十年近く。

まだそう呼ばれていた頃の事は記憶に残っているものの、国境に近いこの街で生まれ育ったゴードにとって、その中心であった王都の事も、この国を治めていた王家の事も遠いものだった。

ましては、当時はまだ表だって名が出る事もない姫君の事など、話に出る事すらなかった。だが、確かに振りかえってみれば、確かその時の王に子は一人きりだったはず。

つまり、アデイは 世が世なら、世継ぎの姫だった訳だ。

(だから…追われているのか?)

とつくに滅んだ国の、歴史にも名を残しているか怪しい姫を今もなお追う理由としたらそれくらいしか考えられなかったが、暗殺でもなく生きたまま身柄を拘束しようとした理由には幾分足りないような気もした。

(…まあ、僕が考えたって何が変わる訳ではないけども)

完全に第三者が出来る事と言えば、すっかり元気のなくなつたアデイと、今まで以上に無表情になってしまったリーフの間を、少しでも取り持つ事くらいだろう。

「…それで、アデイ」

「うん？」

「アデイは、リーフが黙っていた事はどう思ってるんだい」

ゴードの問いかけに、アデイは少しだけ考え込む。

ずっと今まで彼が抱えて、守つて来た秘密。

アデイ本人には当時の記憶など欠片もなく、普通の少女として今まで生きてきた。…生きてこられた。おそらく、今回のような追手は今までもいたのだろうに。

それはきつとずっと、思うより大変だったに違いないのだ。

「…何か理由があつたんだと思うし、感謝してるよ」

基本無口・無愛想で、情緒の欠片もなく。乙女の他愛のない夢は幾度も踏みにじられたし、あからさまにばかにもされた。

それでも嫌いにはなれなかったのは、幼い身では彼しか縋れるものがなかったというのも、もちろん大きい。

けれど何だかんだと言いながら、最終的に彼はアデイの意志を尊重してくれた。子供の戯言だと一蹴しながらも、その手を彼から離す事はなかったのだ。

今までだって、喧嘩のような事は何度もあつた。その度に仲直りをしては、ずっと一緒に旅を続けてきたけれど　でも、こんな風に声をかける切っ掛けに悩んだ事はない。

そもそも、喧嘩でもないのにどうしてこんな事になっているのだろうと思う。

「今まで通りでいたい？」

「うん」

ゴードの言葉にも、素直に頷けた。

「気にならないと言ったら、嘘になるけど…でも、話したくないなら、話してくれなくてもいいんだ。だって、今まで知らなくても何も悪い事はなかったんだもの。それに…多分、だけど。知らない駄目な事なら、いつかは話してくれると思うんだ」

無理に話してもらって、今までの関係が壊れてしまうくらいなら、

知らないままの方がいい。それは紛れもなく本心だった。

自分自身の事なのに、関心がなさすぎるかもしれないけれど。

覚えてもいない昔の事よりも、今までリーフと共に歩いてきた時間の方がずっと、ずっと大事だった。

「じゃあ、その事を伝えたらいいんじゃないかな？」

「それはそうなんだけど、でも…なんか、声がかげづらくて」

「そうか。…じゃあ、こういうのはどうかな」

しょんぼりと頂垂れるアディの答えに微笑んで、ゴードが手招きする。

「…何？」

「仲直り…と言うのも変だけど、彼と話すいい切っ掛けをあげるよ」
悪戯っぽく片目を瞑り、そんな事を言う。思わずアディは詰め寄っていた。

「本当！？ どうするの？」

「ほらほら、声大きい。こういうのはこっそりやった方が効果的なんだから。あのね、……」

そしてゴードがそつと耳打ちした言葉に、アディは目を丸くし

やがてその顔に笑顔を浮かべた。

「…どうかな？」

「いい考えだよ、ありがとうゴードさん…!!」

「あはは、まだお礼を言うのは早いんじゃないかな？」

「あ、そっか！ でも、それならリーフもきつと驚くよ!!」

ゴードに齎された名案に興奮を隠さずにはしゃぐアディは、しかしはっと我に返ると恥ずかしそうに声を潜める。

「…あ、あの…、ゴードさん手伝って、くれる？ 普段、その、

あまりちゃんとやった事なくて……」

「もちろん、そのつもりだよ」

「良かった!」

ようやく見せた屈託ないアディの笑顔に内心ほっとしながら、ゴードはこの作戦がうまく行くよう心の中で祈った。

長く客商売をしているからか、それとも第三者という立場で客観的に見られるからか、接している内に相手の事は何となく見えてくる。訳ありの人間ならなおさらだ。

(ひよっとしたら、彼が抱える事情はアディより深刻かもしれない…と思うのは気のせいかな)

ゴードの目から見ると、アディよりもリーフの方がいろいろと抱え込んだ事情がありそうなのだ。誰に対しても一線を引いているのが、ただの性格からだけでは(…おそらく、大部分は性格なのだろうが)ないように感じたのだ。

(さて、これを彼もいい切っ掛けにしてくれればいいけど)
自分が出る事はこの程度だ。

結局は周囲にどんな問題があるかと、どう乗り越えるかは彼等次第。第三者はただ、見守る事しか出来ないのだ。

「じゃあ、ここは大分片付いた事だし、早速取り掛かるうか？」
「うん！」

楽しげに笑う無邪気な顔。アディの笑顔は、周囲を明るくしてくれる。

ひよっとしたら『王女』のままだったなら、見る事のなかっただろうこの陰りない笑顔を、きっと彼も守りたいと願っているに違いないのだから。

比翼の鳥（19）

『 わたし達は罪人』

フレルはそう、彼等『元・天使』を評した。
確かにその通りだと思う。

天が定めた命運に逆らう事は、本来起こってはならない事なのでから。

ごく限られた一握りの天使を除き、天使は守護する対象の人間の命運に干渉する権限を持たない。

（…そう、アデイのように最初から二つの運命を持っていた人間を守護でもしない限りは）

その人間がどちらの運命を辿るべきなのか　それを見極め、
決定づける為に上位天使と呼ばれる存在は在る。

より世界への影響が小さい方へ　『被害』が小さい方を選び取る事こそ使命。

彼等は『守護天使』であるが、対象となる人間を守る事は皆無という程ない。彼等は世界を維持する事こそが本来の仕事なのだから。

人の側からすれば、上位天使は『死神』のようなものだ。

彼等が守護についた時点で、守護される人間の命運は決められたも同じ。すなわち　速やかな死。

けれどその一人であった自分は、アデイの二つあった運命のどちらも選ぶ事は出来なかった。

天の意を、初めて疑ったのだ。

アデイライト・ケイナ・アディア。あまりにも幼く、無力に等しい彼女が何故、『摘み取られる』側にならねばならなかったのか。

控えめに扉を叩く。

起きていたのか、中からフレルの返事が返る。

「…あら、珍しい」

扉を開いて中に入れば、寝台で身を起こしていたフレルは実に正直な感想を口にした。

「あなた一人なの？ どういう風の吹きまわし？」

「悪かったな。…話を聞きに来た」

「話？」

不思議そうに首を傾げつつ、リーフの様子から少々込み入った話になりそうだと思ったのか、フレルは寝台の傍らにある椅子を勧めめる。

勧めに従って椅子に腰を下ろし、リーフは単刀直入に尋ねた。

「…どうして、俺達が『天使』であつた事を知られてはならない？」

その問いかけに、フレルの表情は引き締まる。

「…そう言えば、話が途中だったわね」

小さく吐息をつき、その瞳は何処か遠くを見つめる。

まるで何かを回想するかのような僅かな沈黙の後、フレルは静かに口を開く。

「ねえ、どうして人の間に『天使』の伝承が伝わっているのだと思う？」

「……？」

その唇が紡いだのは、本題とはいくぶんかけ離れた内容だった。

眉を顰めるリーフへ、フレルは答えを待たずに続ける。

「わたし達は見えないはず。声だつて聞こえていないはずなのよ。

なのに、どうして人々に『守護天使』伝承が伝わっているのか

疑問に感じた事はない？」

言われてみれば、確かにそれはおかしな話だった。

世に対するしがらみが少ない産まれたばかりの赤ん坊や、死の間際に瀕した人間の目には見える事はあるらしいが、当然ながらそれが人の口にのぼる事はない。

なのにアデイとの『天使さま』を求めての旅の道中、それに類した話を幾度も耳にした。そう、多少内容が違っても『幾度』も。

すなわちそれは、一人二人が言いだした事ではないという事だ。時間と共に本質が失われて形が変わるうとも、人々に長く伝わる話には、それだけの理由が何かしら存在する。

「答えは簡単よ。『天使』が実在するのだと、誰かが証明してしまつたから」

「人間が？」

「…どちらかはわからないわ。でも、人か『元天使』がそれとわかる形で痕跡を残したのよ。それがどういう意味を持つか、あなたならわかるでしょう」

かつて、上位天使として人の命運を見定めてきたあなたなら。

視線で問いかけられ、リーフは沈黙した。

ようやく、リーフも知られてはならない理由に気付いたからだ。

天使にとって、もっとも罪深い行い。

世界の在り方に介入すること。

あるいは、定められた予定調和を乱すこと。その罪に抵触する可能性があるからだ。

天使は人を見守り導く。その道標となるのが、天の定めし命運。それは突き詰めれば、あらかじめ決められた時の流れになる。

… 天使は限定的であつても『未来』を知っている。

知っていたからこそ、フレルもリーフも守護する人間の運命を受け入れられず、その未来を変えた。

それもまた、罪。

けれど罪の深さだけで語れば、それはまだ守護天使の格や力を代償に取り返しのつく段階の罪だ。

何故ならそれは『個人』という小さなレベルでの話だからだ。

しかし、一個人の命運だけに留まらない事象　たとえば人が知るべきでない知識が、人の世に齎されるのは、それとは比較にもならないほど罪が重い。

「人の世界に、人以外が関わる訳には行かない。なのに痕跡だけは残されている。具体的に誰がどのような事を行ったのか、片鱗も残されていないのに」

つまり、逆を言うならば。

「…痕跡は消せなかった、という事か」

あまりにも脆く儂い生命の地上人を守護する為に、天の御使いが一人一人についている

その姿を人は見る事は出来ないが、その御使いは生まれた時から人生をまっとうするまで、守護する人間を見守ってくれる

彼らは未来を見通す力を持ち、守護する人間をできるだけよい未来へと働きかける

そしてもし、危機が守護する人間の生命に及んだ場合、一度だけその命を救ってくれる

人の間にそんな伝承が伝わる、どんな歴史的事件が起こったのか彼等にもわからない。

人の何十倍も生き、人を見守って来た彼等ですら。

リーフに至っては人にそんな伝承が伝わっている事すら知らなかった。明らかに伝承に残るほどの出来事が起こったはずなのに。

「…『だから』、知られる訳には行かないのか」

リーフの言葉にフレルは心なしか青ざめた顔で小さく頷く。

「もちろん、これは可能性の話よ。でも…実際、そうだとしか思えない。彼等の内、少なくともどちらか　最悪、両方共が世界から存在ごと抹消されてしまったはず」

抹消。

それは死と異なり、完全なる無に帰すことを示す。人は死ねば魂が残る。それは後に世界の一部となり、巡り巡ってあらたな生命の元となるのだ。

けれど抹消となれば、魂すら残されない。元々存在していた事実すら消される。

世界から、歴史から 人の記憶から。

それは本当の意味での『死』だ。

「…消されるのがこちらだけならいいわ。そもその罪人はこちらだもの。でも、天が見逃してくれるかどうかなんて、わたし達にだってわからない。世界への影響度は人の方がずっと高い。その事を考えたら」

言葉を切り、フレルは凍えるように身を震わせた。

おそらくそれは、人にはわからない恐怖だろう。

彼等にとつては通常の死も、抹消もさして意味は変わらない。けれど、その命を見守り続ける側にとつては。

守護の対象を大切に思えば思う程、身を切られるほどの恐怖が襲うのだ。

「嫌よ。抹消なんてさせたくない」

「…フレル」

「そんな目に遭わせたくて、命をつないだんじゃない……！」

「落ち着け、フレル。…声が大きすぎる」

「…っ、ごめんなさい……」

思わず感情的になった己を恥じるようにフレルが唇を噛み締める。だがリーフもそれを責める気にはならなかった。

彼とて、アデイの存在を危険に晒すなどもつての外だ。

守るべきだと思っただから、側にいるのだ。たとえ、理由がわからなくても。

そう思っただ事が伝わったのか、フレルが小さく笑った。それはリーフに対して初めて見せる表情だった。

「…何だ」

「以前のあなただったら、きつとばかにしたでしょうね」

「……」

「なんて顔してるの。…嬉しいのよ。天使だった頃、わたしの気持ちを理解しようとする者なんて一人もいなかったんだから。あなたがそんな風になつたのは…きつと、アデイの影響なんでしょうね」

(…影響……?)

そうなのだろうか。

確かにアデイを助けてから、人に対して以前ほど無関心ではなくなつた。

目に見える部分、そうでない部分 足りない部分を補い合つて生きるのが人の在り方。アデイを守り続ける日々は、同時に人としての生き方を学ぶ日々でもあつた。

「今のあなたは…『人』に見えるわ」

それは『天使』としてみれば侮辱に近い言葉かもしれない。けれど、不思議と腹は立たなかつた。素直に喜ぶべきか、悩む所ではあつたが。

おそらくそれは、フレルからすれば最上級の褒め言葉だろう。

「…そう見えなければ、困る」

「それもそうね」

リーフの複雑そうな返答にフレルは笑い やがてその笑みを神妙なものに改めると、リーフへと向き直つた。

「リーフ、あなたに…お願いがあるの」

「……? 何だ」

多少態度が軟化したところで、元々友好的ではなかつた事を考えると、フレルに何かを頼まれる事自体に違和感がある。

それが口調に出ていたのか、フレルが微笑を浮かべた。

「あなたが、かなりの手練れだという事はこの間の事でわかつたわ。アデイを、本当に大事にしてるって事も。だから…そんなあなただからこそ、頼みたいの」

フレルは僅かに言葉を迷った後、静かに口を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1134m/>

Evergreen ~ 永久なす緑 ~

2011年10月20日16時04分発行